
真剣で私と戦いなさい!!

御手洗団子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私と戦いなさい!!

【Nコード】

N4821X

【作者名】

御手洗団子

【あらすじ】

昔、川神学園に子連れ武道娘、西園寺あやめがいた。実力は武道四天王すら凌ぐ武術の達人であった。その息子、西園寺伸二が川神学園に入学を果たす。亡き母の過ごした学園生活を自分で体感するために――

PROLOGUE

「お前に教える武術は人を傷付けるモノではない。力無き者を助ける術である」
すべ

幼い頃から母が言っていた口癖の一つだ。今は亡き母の言葉。俺はそれを信念として貫き通している。

物心がついた時から母と一緒に鍛錬をしていた。戦う為でなく、誰かを護るためと。

毎日の修業は、とても苦しかった。毎日毎日同じことの繰り返し、反復練習をするのみ。

実践と称して数々の不良達と戦ってきた日々。そのおかげで刃物や武器に対する対処法が自然と身に着いた。

いつしか俺は川神を中心とする不良グループのカリスマ的存在へと昇華した。

『孤狼の伸二』。一人で川神の不良グループを潰してきた俺に、そんな渾名が定着した。
あだな

十二歳で不良から川神連合の最年少総長として崇められたが、初任
あが
一日で降りた。理由は他人が勝手に決められたから。まあ頼まれてもなりたくないが。

それ以降も俺は戦いを求められたり舎弟にしてくれと懇願された。しかし全部丁重に断った。

それ以降も母との鍛錬は続いたが、そう長くは続かなかった

中学三年の夏。母は余命三ヶ月と宣言された。

母は豪快に笑った。喜んだ。

「そうか。私はまだ三ヶ月息子と過ごせるのか!!」

俺は複雑だった。病気でもない俺にとっては、あと三ヶ月。一日一日が長く、そして刹那の如く時が進んだ。

産まれながら身体が弱かった母は、実は産まれた当初は余命五年だった。

それが十歳、十五歳、二十歳、二十五歳、二十八歳まで伸びて、今に至る。

「人生は早い。特に私は。だから何でも早めに済ませておいた」

俺を産んだのが十三歳。大体今の俺と同じ年で俺を産んだ。

一回り年上の父と駆け落ち同然で結婚して、身体を強くする為に武術を嗜む母は子連れ武士娘として学園に通う波乱万丈で濃い人生を送った。

三か月後、今まで俺と共に武術を極め求めた母は、もういなかった。

最後の時まで俺と鍛錬をしていた。母が病室で寝ている最中でも、傍で母から見えるように。

俺は人生に絶望を感じていた。今まで辛い鍛錬やボコボコに殴られることはなくなったが、途轍とてつもない喪失感が襲う。

そんな時、海外出張中の父である西園寺時隆さいおんじときたかから連絡が来た。

母が過ごした学園へ入学してみないか、と。

俺は悩みに悩みぬいて、準備を整えた。学園へ入学する準備を。

2009年春――俺は川神学園へ入学を果たした。

PROLOGUE (後書き)

皆様初めまして、御手洗団子でございます。

来年一月発売まじこいSに繋がるようにストーリー展開をします。

なので殆どがオリジナル展開で、たまに原作に介入します。

8..2ぐらいの割合でしょうか。

あとついでにヒロイン募集も致します。

原作ヒロインの○○○をヒロインに！ オリジナルヒロインを考え
たので良かったら使ってください！ など。

あと感想もお待ちしております

それでは次回お会い致しましょう。

第一話 人生二人目の敗北

四月五日の日曜日。入学式が明日に迫る本日夕方、俺は鍛錬兼川神学園へのルート確認の為ランニングをしている。

息が上がり、足が重く、脳がフワフワした感じになる。入学式が楽しみで結構飛ばし過ぎたかな？

それでも俺はスピードを緩めない。それよりスピードが速くなる。楽しみだ。母が人生で最も楽しんだ場所である川神学園でどのような出来事が起きるのか。

俺の自宅から全速力で走り続けて三十分。全速力で走って来たので汗がダラダラ、喉はカラカラ、足はガクガク、けれども俺は平常心を装い顔を上げたまま荒く空気を取り込む。しかし、ようやく川神学園前に到着した。

目の前には大きな門が立ち憚^{はばか}って中の建物が見え辛い。残念。入試試験は試験直前まで教科書に目を通し、受験が終わったら頭が真っ白になり建物をよく見ていなかった。

今日はじっくり内装を見ようと思ったが、この分だと内装は明日のお楽しみ。今日は帰って飯作るか。

俺は学校の周りをジョギング程度のスピードで走りながら学校を観察。今日の観察で分かった事は、川神学園が普通の学校と比べて大きいという事だけ。他に特別凄い所は見当たらない。

一周走り終わった俺は川神学園の校門の前に立ち、これから通う学

び舎に一礼。

バツと顔を上げ川神学園に背を向け走り出そうとしたら、目の前に髭の長いお爺ちゃんがいた。

「ほう。中々良い目をしているのう。どこかで見た目じゃ」

この老人、見たことがあるというか、最近見た。学園のパンフレットで。ていうか、

「が、学長?!」

「そうじゃ。わしはその学園の学長を務める川神鉄心じゃ。君、新入生かのう?」

「はい。明日からこの学園に入学します、西園寺伸二です」

俺の名を聞いた直後、学長は合点がいった、ような表情を浮かべた。

「なるほどのう。彼女に似ていると思っていたのじゃが、君があやめの一人息子か」

ほっほっほっ。と突然笑う学長。

「学長、母を知っているんですか?」

「当たり前じゃ。十数年前の川神学院を牛耳っておった子連れ武士娘を知っていない方が可笑しいわい」

俺の耳にとんでもない情報が入って来た。母が、川神学園を、牛耳

っていた？

「ん？ なんじゃ、実の母の武勇伝を知らんのか」

「は、はい。恥ずかしながら、母から聞いておりませんでした」

「まあ、彼女は自分の強さを他人に見せびらかすような愚かな真似はせんからな。実の息子に教えんのも納得じゃ」

学長から聞くと、俺の母親はとんでもない有名人らしい。武道をしている者ならば、一度は聞く名前だと。

かの有名な武道四天王の内二人を一对一の戦いで葬り去ったと（実際には死んでいない）。他にも人を助けるために武術を極めていたと。

「……このぐらいかの。細かく言えば色々あるのじゃが、わしも忙しい身なのでな。この辺で失礼する」

「はい！ ありがとうございます！ これからよろしく願います！！」

学長は「ルーに良い土産話が出来た」と軽い足取りで学園内へ向かった。

俺は学長を見届けてから家へ帰る事にした。

俺は家でシャワーを浴びて汗を洗い落とす。家は一人暮らしのマン

ション住まいで、海外出張中の父からの少ない仕送りと日雇いバイトでなんとか生活費を賄^{まかな}っている。

学生に大金は持たせられぬと父は毎月家賃と別に十万円の仕送りをしてくれる。実際十万円で生活費は足りるが、趣味のお金は自分で稼いでいる。必要な時に稼げるので日雇いが一番効率が良い。

浴室から自分の部屋へ戻ると、ケータイが震えた。メールが着信したようだ。

送り主は鈴木からだ。メールの内容は、とある女性に追われている。追いつかれるのは時間の問題、助けてくれと。

俺は一万円な、と返事を出すと、三秒後に返事が返ってきた。つかマンションにチャイムが響き渡った。

『助けてくれ！ 早く、早く開けないとアイツが来る！！』

仕方なくマンション一階の共用玄関を開いて、俺の部屋へ招き入れる。

鈴木は肩で息をしながらリビングで座り込んだ。

「た、助かったぜ伸二。しばらく匿^{かくま}ってくれ」

「その前に一つ質問。誰に、どうして追われたんだ？」

「は、話さないと駄目か？」

「当たり前だ。前にお前が原因で俺まで補導されそうになったろ？」

鈴木は黙ってしまった。表情で分かる。こいつ、犯罪を犯して逃げて来たな。

「追っているのは誰だ？ 警察？ それとも――」

「し、知らねえよ！ 取引の最中、突然アイツが――」

「取引って、なんだ？」

やっちまったと鈴木が顔を俯うつむかせた。どうやら本当に犯罪を犯したのか。

「チャンスやる。ここからさっさと出て行け。でないとお前をぶん殴る」

「止めてくれ！ せめて、せめて警察を呼んでからにしてくれ！ アイツには、アイツにだけには捕まりたくねえよ……」

泣きながら俺に警察を呼んでくれと頼みこむ鈴木。しょうがないから警察を呼ぶのに備え付け電話を取り、11と押し、最後に0を押す瞬間、彼女が窓を突き破って入って来た。

「――き、ききききききた――！――」

鈴木の前に、一言では言い表せない美女が毅然きぜんとした姿勢で立っている。

腰まで伸びた艶やかな髪、猛禽類を思わせる瞳を持ちながら、それを引き立てる各部分。モデル並みの身長とグラビアモデルにも負け

ない豊満なボディ。

俺は正直、見惚れていた。

鈴木を一蹴りで沈黙させる姿までが、まるで芸術品のような美しさを
持つ女性。俺は彼女が俺に攻撃を仕掛けるまで見惚れていた。

「川神流無双正拳突き——！！！！」

見た感じぶっちゃけ速いストレートパンチだった。

俺は襲いかかって来た女性の手首を掴んで背負い投げに持って行った。

「!?!」

女性は油断していたのか受け身を取らずに背中から落ちた。怪我は
していないだろうが、常人ならしばらく悶え苦しむ程の痛みを受け
ただろう。

「ほう。貴様やるな。ただのクズではなさそうだ」

いやまあ母から武術を習ったしなあ。これぐらいは当然だ。

「なんか誤解しているようだが、俺はそいつの仲間ではないぞ?」

「嘘を吐くな! 貴様が黒幕だと、他の仲間から情報は貰った。観
念して肅清を受けるんだな!!」

いやいや。仲間って、俺一人も仲間だと思ってる奴いないし。

「オラオラオラオラ!!」

女性が先程のストレートパンチより若干遅いパンチの連打を仕掛ける。右頬、鳩尾、左わき腹などランダムにパンチが放たれる。俺は一つ一つ手の平で流すように連打を捌く。

連打のスピードを緩めずに突然右足が俺の顎を捉えたが、俺は紙一重で後方に避ける。

多分実力は俺より上。護りに徹しているので攻撃は避けられるが、攻撃の隙がほとんど無い。ま、例え攻撃が出来たとしても女性を殴ったりしないけど。これ母の遺言。女性はどんな理由でも暴力を振るうべからず。

「これを避けるか！ 良いぞ良いぞ！！ 血が沸いてくる！！」

女性は次々と多種多様な攻撃を仕掛けるが、俺には見える。だが身体が着いて来ない。段々精神と身体が引き離される。

一つ、また一つと軽いダメージを負う。これでは俺の根負けで最後には大ダメージを受けてしまう。逃げ出そうにもここは五階だ。玄関から逃げるにしても鍵を開けている間に女性の攻撃が来る。飛び降りるなんて以ての外。上手く飛び降りても足へのダメージで俺が動けなくなり、この女性が追って来てゲームオーバー。

「楽しかったぞ！ 残念だが、これで終わりだ！！」

女性は俺との距離を置いて、力を溜める。

「はああっ！！！！ 川神流奥義、ルビーオーバードライブ紅色の波紋！！！」

俺の腹部を中心に女性の正拳の衝撃が、頭の先から指の先まで隅々まで行き渡る。

今日は初めて母以外の人物に負けた、クソったれな一日となった。

第一話 人生二人目の敗北（後書き）

今日テストなのに、何やってるんだろう、俺。

息抜きと言ってネットゲをやって数時間、終いにはプロローグだけで終わるはずが一話まで書きしまった。

まあ、赤点取らなければ良いやWWW

ではまた次回、更新の時に会いしましょう！

第二話 入学式の朝（エロゲ展開あるよ！）

「久しぶりに他人の家で寝たなあ」

俺は謎の女性に謎の必殺技を喰らって和風の部屋で寝ていた。

俺は記憶の中では初めてベッドじゃない布団で寝た。意外と寝心地が良い。それと畳にも匂いがあるんだな。結構良い匂いだ。

兎に角謎だらけだ。少なくとも、あの女性が川神流との関係があるという事だけだ。

腹部のダメージは、まだ癒えていない。こりゃあ完治まで数日かかるな。

だが動く事はできる。どこだか知らないが、さっさと家に帰るか。

あー、確か鈴木が逃げ込んだ所^{せう}で、俺が鈴木達の黒幕ってあの女性^{せい}が思い込んでいるよな。

ここがもしあの女の自宅なら、逃げてもすぐに捕まるだろうな。

拘束が何一つされていないし、ドアも鍵が掛かって無い事からこの家の中は自由に動けるはず。

一^{ひんがし}先ず俺は着されていた浴衣を脱いで布団の横にある、俺の私服に着替える。ご丁寧に下着まで脱がされていた。

裸になってパンツに片足を入れた瞬間、障子がスーッと開かれた。

「君、起きた————」

「……………」

……整理しよう。

障子の向こうにはポニーテールの可愛い少女がブルマ姿で立っていた。しかも薄ら汗で服が肌に張り付いて少し色っぽい。いや、胸が無いから全然色っぽくない。せめて謎の黒髪ロング女程の胸だったら良かったのに。

今気付いた。俺はポニーテールの彼女の前で裸だ。

彼女は俺の朝だから元気になった男のシンボルを凝視している。

「ぎゃあああああああああ!!」↑ポニーテール。

「キャ————!!」↑俺。

俺は空気を読んで乳首と男のシンボルを隠す。しかし、大きくなったシンボルは俺の手で隠しきれない。

「エッチ! この変態! 男の部屋に入る前はノックをしてって言ったでしょ!!」

男女逆転。俺はその場のノリだけでそう叫んだ。誰得だよ、俺の裸とか。

「どうした一子! 一体なにが———」

なんという事でしょう。まさかあの謎の黒髪ロングの女性が来るとは思いもありませんでした。

黒髪ロングの女性は右手に力を溜めるモーションを起こした。

「ちょっと待て！ 俺はただ、着替えをしていただけ——」

「ふんっ！」

俺の鳩尾に的確なストレートパンチを問答無用に叩きつける黒髪ロング女性。

「お姉さま、怖かったわ！」と涙を流して謎の女性に抱きつくポニーテール。

「貴様、まさか一子を襲うとはな」

「お、……おそ、って、ねえよ……。着替え…中に、とつぜ、んは
いって……来たんだ」

うえっ。胃液が喉から込み上がってくる。昨日の晩から何も食べてないのが救いだ。何とか逆流する胃液を抑え込める。

「いいか、私達が出て行って1分以内に着替えろ。していなければ、
あとは分かるな？」

そう言って二人は部屋から出て行った。

くっ、鳩尾殴られて力が入らない。それに空腹や昨日のダメージが

付いて上手く身体を動かせないのに、アイツ無茶な要求しやがって。せめて下だけでも着ないと、アイツに殺されかねない。

パンツズボンを履いて、上のシャツを着ている最中に一人、黒髪ロングのアイツが入って来た。

今度は何をされるかと身構^{みがま}えてたら、彼女は大人しく俺の前で正座した。

「昨日はすまなかった。この通りだ」と頭を下げる。

「勘違いでお前とあの部屋をボロボロにしてしまったのは、反省している」

潔^{けつ}い。そして正直者。俺が彼女に感じた彼女の内面だ。

「いや、俺こそ犯罪者を匿^{かく}っているような真似をしたんだ。疑われようがないよ」

「言い訳ではないが、私達は、あの鈴木達の罠にはまったんだ。君を黒幕に仕立て上げて、私や一子を君と戦わせて助けて貰う作戦だったらしい」

俺が寝ている合間に誤解が解けていて良かった。このまま鈴木達と道連れに逮捕なんてされたら堪^{たま}らない。

「あの、鈴木達は何をしていたんです？」

「麻薬の密売だ。最近出始めたドラックのユートピアを密売してい

ただ」

「麻葉って、鈴木達は今、」

「警察だな。今頃カツ丼でも食べてるんじゃないか」

はあ。これで鈴木達のボディガードのバイトは潰れたな。アイツ等クズだったけど、金の支払いは良かったのに。

「話を変えるが、君は近くに親戚の家や親しい友人は？」

「いや、いませんけど。どうしてです？」

彼女は実に申し訳ないという表情で、ある事実を告げる。

「昨日の私との戦いを憶えているか？」

「ああ。俺が防戦一方だったやつね」

「それで、マンションの修理期間が1カ月かかるんだ」

「修理？」

「憶えてないのか？ 私の最後の攻撃で、リビングの壁や床の至る所にヒビができてしまったんだ」

マジか。つーか俺良く生きているな。

住む場所か、どうしよう。このままだと野宿決定だ。マンションを借りるにしても未成年者一人で借りれるのか？ 保証人が必要なら

海外出張中の親父は無理。福島に住む叔父叔母を呼ぶしかなさそう
だ。それでも叔父や叔母にだって用事があるんだ。すぐに来れる訳
でもないし。

「君が良かったら、川神院に住まないか？」

「川神院、てあの川神院？」

「そうだ。私は川神百代^{かわかみ ももよ}。川神院のトップである川神鉄心の孫だ。
君を期間限定の門下生として川神院に入るようにジジイには伝えて
おく」

成る程。俺が手も足も出なかった理由が分かった。話なら聞いた事
がある。川神百代と云う最強の武神が川神市に存在すると。初めて
肉眼で見た。ならばここは川神院のどこかの部屋か。

川神百代の言う通りここに住まわせて貰おうかな。親父から一カ月
の家賃代を誤魔化^{ごまか}せる。

「えっと、よろしく願いします」

「ああ。よろしく。君の名前、聞いてもいいか？」

そういえば自己紹介がまだだったな。

「俺の名前は西園寺伸二^{さいおんじ しんじ}。川神学園一ね、ん……………ああ！ 百代
さん！ 今何時ですか?!」

「今は八時半頃だぞ」

「入学式は九時半だから、このままだと遅刻だ！　すみません！　俺学園に行ってきます！！」

俺は着の身着のまま川神院を飛び出した。

まずは家に帰って制服を取りに行かねば。流石に私服で登校は駄目だ。

て、

「靴はどこだ！？　つーか川神院広っ！」

結局川神院を出たのが九時前。家に戻って着替えるので九時十五分。川神学園へ着く頃には既に十時を回っていたとさ。

第二話 入学式の朝（エロゲ展開あるよ!）（後書き）

テストの手応えを全く感じなかった御手洗団子です。

もう寝不足で私の頭も狂っていたんでしよう。

数学テスト前の休み時間、私は誰かクラスメイトを道連れにしよう
と決心していました。

数学の公式を暗記しているI君の耳元で、『このI木、なんの木、
気になる木♪』と歌ってやりました。

案の定、私が思い出し笑いをして、試験監督の先生に殴られました。
つられてI君も笑って結果オーライでした。

では、次回の更新の際にお会いしましょう！

第三話 眠れる河川敷のお姉さん Part 1

諦めた。だって入学式の途中で割り込む勇氣はない。

だからと言って川神院に戻るにしても、気まずいだろう。しょうがないので多摩川の河川敷をコンビニで買ったパンを頬張りながら一人トボトボ歩く。

初めて多摩川の河川敷に来たが、中々の広さだ。鍛錬するには持ってっこいだな。今度からここを拠点に鍛錬を積むか。

河川敷を海側に向かって歩く。

しばらくすると、一人の女性が倒れていた。

行き倒れか、と女性に駆け寄る。

女性の顔を覗き込むと、行き倒れでも何でも無く、ただ寝ていた。

女性が無事なのを確認して安堵あんどの溜息を吐く。

それにしても、この女性は身長や胸や尻など色々と大きいな。身長は俺より若干大きいかな？

……ま、まだまだ俺は成長途中だし！　すぐに追い抜くさ！

このお姉さん、幸せそうに寝ているな。俺も百代さんから受けたダメージと疲労で眠い。パンを食べてある程度腹も膨ふくれたし、俺も寝るか。

お姉さんから数m離れた場所で俺も横になる。

背中は草でチクチクするが、それ程不快にはならない。むしろ太陽の温かさときおり時折吹く風が心地よく、俺の眠気を刺激する。

視界の隅で黒い物体が動いた。目線を移動すると、黒猫が俺に擦り寄って来た。

俺は何の抵抗もしないでいると、黒猫は俺の腹の上によじ登った。平然と俺の腹の上で丸くなる。黒猫は絶好のベッドを見つけたようだ。

俺も黒猫に続いて深い眠りに落ちた。

腹が少し動いた。

どうやら黒猫が目を覚ましたようだ。

俺も薄く着いた目脂めやにを擦り落とす。

ちょっとした違和感が俺を襲う。寝る前は草でチクチクした頭の裏が柔らかな感触に包まれていた。

目を開けると、俺の隣で寝ていたお姉さんが、俺を膝枕ひざまへして寝ていた。

「…………えっ?!」

驚いた。二重の意味で驚いた。

まず一つは他人である俺を膝枕する事、もう一つはその状態で寝ている事だ。この状態でよく眠れるな。

「Z Z Z Z Z Z」

こんな体制で寝られるな。ていうか顔が近い！

良く見ればお姉さんは結構な美人だ。途端に心臓の鼓動が速くなる。今まで女性にこれ程の至近距離で触れられることは無かった。当然の反応だよな？

どれほど時間が経ったであろう。数分か、或いは一時間以上俺も二度寝をしていた。

不意に頭を撫でられる。目を覚ますと、さっきのお姉さんが幸せそうな顔で俺を良い子良い子してた。妙に照れくさい。みょう

「や」

「……おはようございます」

俺が起きてるのが分かると、頭から手をどけた。

「ごめんね。勝手に膝枕しちゃって」

「いえ、別に大丈夫ですよ。俺も気持ち良く眠れたし」

「そう？　ならよかったあ」

そういうまた俺の頭を撫で回す。

「うふふ」

「？　何が可笑しいんですか？」

「いやあ、君みたいに大人しくて可愛い弟が欲しいなあ、と思って」
年上と思われる女性に、可愛いと言われたのは初めてだ。可愛いと言われたのに、全然嫌じゃない。むしろもっと言われたくなる。

「ウチの弟って、ヤンチャでそんなに年離れてないからさあ。君ぐらい年下で可愛い弟が良か……ZZZ」

って、寝てるし。俺の頭が女性の手でロックされてる。これでは動けない。……いや、この女性の力が強くて離れるにも離れられない。母と百代さん、それにこのお姉さんといい、知らない間に日本の男女の力が逆転したのか？

「……んあ、ごめんごめん。これじゃあ帰れないよね」

はい、と頭から手を放すお姉さん。このまま寝るわけにもいかない
ので体を起こす。

「ここって、良い場所だよね。昼寝には最適だよ」

「そうですね。俺も良いと思います」

「芝生^{しばふ}が布団代わりになってねえ……」

そう言ってまた瞳を閉じるお姉さん。どんだけ眠いんだよ。

「……げっ、もう3時半かよ」

軽く五時間も俺とお姉さんは寝ていたのか。お姉さんに至ってはそれ以上だな。

「もう行くの？」

「起きてるのか寝ているのかハッキリしてください……」

正直このお姉さんの思考回路が分からん。会話をしたいなら起きろ。寝たいなら寝ろ。

「お腹が空いたんで俺は帰ります」

「そう。私はもう少し寝るね。また会おうね」

「はい。また会いましょ、……もう寝てる。」

お姉さんは豪快に大の字で睡眠を始めた。今度こそ本当に寝ただろう。

俺は遅めの昼飯を食べに繁華街へ向かう。

第三話 眠れる河川敷のお姉さん Part 1（後書き）

タイトルにPart 1と入れましたが、次の更新には続きません。

名前は敢えて出しませんでした。が、板垣辰子の登場回です。

にじファンで板垣辰子の検索結果が0で驚きました。

にじファンのまじこい作者は辰子があまり好きではないのですかね。

では次回、『伸二、初めての川神学園（仮）』でお会いしましょう
！！

第四話 百代の罰と報い

勘違いで伸二の家をボロボロにしてしまった次の日の夜、川神百代は祖父である川神鉄心に呼び出されていた。

「モモよ。お主、一般人に暴力を振るったな？」

「はい、申し訳無く思っています」

普段は鉄心の前では高圧的な態度を取る百代だが、今夜は違う。百代も自分で犯した罪を認識しているのだ。

「いくら敵の誤情報に振り回されたとしても、例え罪人に奥義を使うのはやり過ぎじゃ。しかも誤って何の罪も無い一般人に奥義なぞ言語道断。反省せい」

「はい。彼の家の修理代は、私が払います」

「そんなの当たり前じゃ！ それだけでは罪滅ぼしにすらならん。一つ聞くんが、何故奥義なぜを使った、いや使わざる追えなかった？」

「最初は奥義を使用するつもりは在りませんでした。しかし、彼が想像以上に強かったのでテンションが上がり、彼を確実に倒すには川神流奥義しか無いと思っていました」

「奥義を使わなくとも、お主の力量りきりようなら使わなくとも勝てただろう？」

「はい、その通りです。言い訳するつもりは在りません」

鉄心は大きなため息を吐き、ツルツルな頭を一搔き二搔きする。鉄心の口から、百代にとって衝撃的な言葉が発せられる。

「川神百代。本日この時間を以^もって、西園寺伸二の家が修繕^{しゅうぜん}されるまで、一切の戦いを禁ずる」

「なっ?! そんな!」

「勿論挑戦者が来たとしても、話すな、目を合わせるな、触れるな、戦うな。これは絶対じゃ」

百代は驚愕した。ある程度の罰は予測していたが、まさか戦いを禁止されるとは予想になかった。精々修理費だけを出しとけば問題無いと、そんな軽い考えをしていた。

「今後の登下校の際はルーを監視役にする。挑戦者はルーに相手になってもらう。場合によってはワシも相手をする」

驚く百代を余所^{よそ}に、鉄心は更に厳しい条件を増やす。

「修理代も、己^{おのれ}が働いた金で出すように。他人から借りた金を使ってもいかん」

「……くっ、わかった」

「これらの条件を修理終了、つまり一か月後までに全て完了しなかった場合、お主の力を封じる。覚悟しておけ」

「力を、封じる……」

百代は聞いた事がある。昔、川神院師範代で百代の師匠であった釈迦堂刑部やかどう けいぶという禍々しい力を持った者を、破門の際に悪行へ力を使わせないために、鉄心は釈迦堂の力を封印しようとしたが、寸すんでのところ川神院を逃げ出したと。

「今後は良く考えて行動するように。あと最後に。伸二に伸二が納得する罪滅ぼしを自分で考え、自分で行うおこなように。これも前の約束の期限以内に達成しなければ、やはりお主の力を封印する」

百代は苦虫を潰したような表情を見せるが、反論することはできないので全ての条件を承諾した。

「先に言っておくが、伸二に直接聞くのも駄目じゃ。自分で考え、誠意を込めて、伸二が納得する罪滅ぼしを考えよ。不正なぞ伸二やお主の親しい仲間に訊けば丸解まるわかりじゃ」

何も言い返さずに「失礼します」と百代は悔しそうに鉄心の部屋を後にする。

「……まさか百代に奥義を使わせるとわ。しかも二日ではぼ完治させる身体能力。末恐ろしいのう、あやめの息子は。いやはや流石さすがと言った所か」

ほっほっほ、と鉄心の笑い声が部屋に響いた。

「十年前と同じよう、現代いまでも西園寺家の血を周囲に振る舞うのかのう。以前のあやめのように」

第五話 不良Sの悲劇

川神院は結構過ごし易い。^{やす}お風呂もデカくてゆっくり入れるし、飯も美味い。

晩御飯を食べ終えて三十分後、俺は青色が主体のアディダスジャージを着用。これが俺の鍛錬着。何故アディダスかって、デザインが気に入ったから。

川神院の玄関先で足を中心に入念なストレッチ^{おこな}を行う。

ストレッチが終わり、最初はジョギング程度のスピードで走る。徐々に走るスピードが速くなる。足が温まって来た。このままノンストップで多摩川まで走り続ける。

多摩川に着くと、先客がいるようだ。遠くて暗いのでシルエットでしか見えない。なにやら細長い棒、槍を振り回している。

いや、槍は綺麗な弧を描きながら宙を舞っている。使い手は中々の槍使いだ。

俺は槍使いが気になったが、鍛錬を始める事にした。

腕立て伏せ、腹筋、河川敷階段ダッシュ、逆立ちで歩いたりして身体全体の筋肉を刺激する。

一通り体を虐^{いじ}めてから、母から習った武術の型を確認する。

ある程度疲れた^{つか}状態で型を確認しないと実践では役に立たない。疲

れている時は勿論、怪我をしてても技を繰り出せないのは敗北したと同じだ。これはスポーツ全般に言える。

ラグビーが良い例だ。ラグーマンは尊敬に値するスポーツマンだ。

プロ選手は例え足の靱帯じんたいは伸びた程度ではテーピングをして試合に出たり、骨折して痛みを堪えながら試合をする人だって普通にいる。

俺は一通りの型を確認し終えてから帰路についた。

翌日、俺は初めての川神学園登校して、自分のクラスである1-Cに向かっていた。

Cクラスに入るまで周囲からの視線を感じた。俺の姿を見て友達とヒソヒソ声で会話したり、道を塞ぐように向かい側から歩いてきた男子三人組は俺の姿を認識すると三人は散り散りになって道を譲った。

俺を不良か何かと勘違いをしているのか？

その答えは学園の掲示板で明らかになった。

Cクラスに着いても、俺の半径2m以内にまったく入って来ようとならないクラスメイト。完全に孤立した。

俺は暇だったのでケータイで気紛れに川神学園の掲示板を検索。

『川神学園』『掲示板』で検索結果の一番上に『川神学園専用掲示

板』が表示された。

そのサイトを開いてスレッド一覧を確認すると、一つ気になるスレッドを発見。

タイトルは『川神百代と互角に渡り合った不良S part 2』。
俺は迷わずその掲示板へジャンプ。

そこにはある事ない事が書かれていた。

『川神百代が不良Sが戦ったって本当かよ！ しかも互角だったらいいじゃないか?!』

『百代さんの奥義を喰らっても意識は保たもっていたらしい』

『しかも奥義を発動しなければ負けてたってよ』

『うわ化け物ジャン!』

『気性きしょうも荒いから怒らせると日常生活に障害が残る怪我を負わせられる』

『そのSは麻薬の密売組織のリーダーだって』

『しかも警察はそのSの証拠を発見できなくてタイーホできない』

『Sは川神学園の1-C所属らしい』

『私Cクラスだけど、そのSは怪我で休みだって』

『学校も疑わしいだけじゃあ退学にできないとよ』

ここまでが昨日までの書き込み。

なんだこれ。ほとんどが嘘で溢あふれてやがる。百代さんの完全試合だったのに、まるで俺が百代さん並の化け物じゃないか。

それでこっからが今日の書き込み。

『Sが登校してきた！ でも意外と外見は普通じゃね？』

『バカ！ それは仮の姿に決まってるだろ！ 川神百代が学園いるから派手に行動できないんだ！』

『俺今Cクラスから実況するわwwww 今Sはケータイでどっかのサイトにアクセス中wwww』

『止めろスネーク！ 危険すぎる！』 『スネーク、バレたら殺されるぞ？』

『皆びびりすぎwwwwww 俺余裕だからケータイ覗きに行くわwwwwwwww』

『今なら間に合うからやめろ！！』

『ちょwwww お前らびびるなよwwwwww こっちまで不安になるwwwwww 今Sの後ろwwwwww バカだから俺に気付いてないwwwwwwww』

『この掲示板覗きこんでますけど？ byS』

俺は背後を振り返ると、ケータイ片手のシルバーアクセを財布にジャラジャラつけた茶髪ツンツン頭の、所謂^{いわゆる}チャラ男が不自然に机から身を乗り出していた。チャラ男はカチカチと歯を震わせる。

「言っとくけど、この掲示板は嘘————」

「ひゃあああ！！ こ、ここここ、こ、こ、kろしやにやいしえええええ！！！！！！」

チャラ男は突然奇声を上げて一回転びそうになりながら教室を飛び出した。いや逃げ出した。

掲示板がヒートアップ。

『本人キターーーーーー!!!!!!』

『あのスネーク、逝ったな』

『Cから凄い形相で逃げてたwwwwワロスwwww』

『怖え……。Sが一言何か言ったらスネークが突然逃げ出した……』

『やっぱり噂は本当だったのか』

『僕同じ学年じゃなくて良かったよ』

『レス数が1000を超えています。残念ながらこれ以上は書き込めません。』

クラス全体に緊張が走る。俺が弁解しようと視線を一人の男子生徒に合わせたが、

「チョット俺の話を聞け！」

「ひいひい!!」

男はとても怯えた様子で直立不動になった。

「お前等は勘違いしている！ 良く聞け！ 俺は麻薬組織の、」

ジョボ、ジョボジョボジョボ。

男は恐怖のあまり足下が崩れて地面に座り込む。黄色い液体が男子生徒のスポンを浸食し、やがて男子生徒の周りに黄色い液体の水溜みずたまりりができた。男子生徒は白目を剥いて気絶した。それを見た女子生徒数名が涙を浮かばせて肩を震わせていた。

漏らした男子生徒は俺にも責任があったので、尿が服に付かないように肩に担いで保健室へ運んだ。

こうして、俺の噂が学園中に広がった。

『恐怖の大王西園寺伸二は一言で人の精神を崩壊させることができる。』

登校初日で気に入らないCクラス男子二人の精神を破壊した。

そのうちの一人を保健室に連れて行って、男子生徒の純潔を奪った』

いつの間にか俺がホモ扱いになってワロタ……。

第一回 LOVEかわかみ

『ハアイエブリバデイ、春と言えば保育園や幼稚園、そして小学校に小さな少女が入学するとても素晴らしい季節だね。今週もLOVEかわかみがはじまるよー。パーソナリティは2ーSでスキンヘッドがトレードマークの井上準』

『人生、百花繚乱酒池肉林。3ーFの川神百代だ』

『まずは新入生の皆さん入学おめでとうございます。このラジオは百代さんに悩み相談する質問バラエティ。詳しくは学園掲示板を見てね。さて百代さん、今日もメールが沢山来てますよ』

『そうか』

『そうかってあっけないですねー。主に貴方と戦った不良Sについての質問ですよ？』

『ああ。伸二の事か』

『ちょっと、気を使ってイニシャルで呼んだのに本名言いますか！？』

『どーでもいいだろ。さっさとメールを読め』

『人使いが荒い先輩ですね。さて、本日最初のメールです。『百代さん、S君が奥義を喰らっても意識を保っていたのは本当ですか？』』

『本当だが、そのあと手刀で眠らせた』

『すごい怪物が一年に現れましたね。じゃあ次の質問。『噂のSは川神学園でどれぐらいの強さですか？』これ俺も気になります。百代さんの奥義を喰らっても生きて登校しているって事は相当強いでしょう？』

『そうだな。川神学園の生徒の中でなら、男子は圧勝するが、一部女子には勝てないだろ』

『そうですか。最近の女性は強いですからね。特に百代さんが。次行きましょう『S君が怖くて一年全体の空気が重いです。どうにかなりませんか？』そういうえば今日の一年は、お通夜状態でしたね』

『その事なら大丈夫だ。あいつは無闇やたらと暴れないからな。もし暴れたら私が肅清しよう。ま、暴れたりはしないだろうが』

『心強い言葉ありがとうございます！ 次の質問、『僕の彼女が照れていて画面から出てきません。彼女が出てくる何か良い方法ありませんか？』……答えますか？』

『そもそも私の存在自体が画面のなk——』

『はい、メタ発言はやめましょう。ちなみに画面の中から女性が出てきません。現実を見て、三次元^{りある}で女性に恋しなさい』

『なあハゲ。今日の質問詰まらないぞ』

『仕方ないですよ。百代さんと渡り合った一年の話題で持ち切りなんですから』

『もっとう、血が沸く話が無いか？』

『そんなものあるわけ、……新着で面白いメールが来ました。』純
さん百代さん初めまして。何やら1—S女子の武蔵^{むさし}小杉^{こすぎ}と西園寺伸
二が決闘するようです。どちらが勝つと思いますか？』百代さん、
勿論勝つのは』

『武蔵だな』

『そう武蔵が勝つよねって、ええ！！ 嘘ですよね！？』

『スポーツやトランプならどちらが勝つか分からんが、試合なら確
実に武蔵だ』

『あ、もしかして西園寺は川神流奥義を喰らった反動で本来の力を
発揮できないとか？』

『いや、そもそも伸二は武蔵を相手に勝負しないだろう』

『——おっと。早速決闘の結果が届きました。どうやら西園寺は決
闘を受けなかったようです。百代さんの予測通りです。去り際に武
蔵から玉無しと言われ、西園寺は振り向いて視線だけで黙らせたよ
うです。本当に怖い一年が入学しましたね』

『私にとっては可愛いけどな』

『百代さんと俺達一般市民と一緒にしないでください！ 百代さん
から見れば俺たち学生全員可愛いでしょうが！！』

『おいハゲ。もう時間じゃないか？』

『おっとそうですね。それでは来週、この時間にお会いしましょう。
パーソナリティは井上準と』

『川神百代がお送りした』

『それでは良い午後の授業を！！』

第六話 風を翔る少年との出会い

なんつーか友達が出来ない。

クラスメイトどころか担任の新任女性教師も俺の噂に惑^{まど}わされて、Cクラスは黙々と授業が進む。まるで特進クラスのようにチョークと鉛筆の無機質な音と、担当の先生の震える声が教室に響く。随分^{ずいぶん}寂しい授業だ

昼休みになって俺が教室に残ると、他の人は教室から出て行き、逆に俺が出て行くとクラスメイトが教室に戻る。

仕方が無いので、俺は屋上で一人寂しく弁当を食おうとした。

二階へ続く階段の途中、不意に後方から俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り向いたが誰もいない。聞き間違いか、ともう一步階段を上がると女性の声が聞こえた。

「西園寺伸二！」

うん、間違いない。俺を呼んでいる。もう一度振り返ると体操着姿の女子が立っていた。

そういえば川神学園は体操着がブルマだったな。……もしも俺がブルマを履きながら体育の授業を受けたらどうなる？ クラスは爆笑の渦に包まれて、俺は晴れてクラスメイトにお茶目なキャラとして見てくれるんじゃないか？

よし、ブルマを買おう!!

俺は購買部に自分に合うブルマを探しに行こうとするが、

「ちょっと待ちなさい！ プレミアムな私を無視しないでくれる？」

いや待てよ。昼休みに堂々とブルマを買ったら変態扱いされないか？
ここは放課後の誰もいない時間に買うのが一番ベストだろう。

「だから無視するな!!」

なんか変な女子が殴って来たけど、遅い。百代さんと比べると月とスッポン以上の差。速さも力も、特にセンスが感じられない。

「中々やるわね。私のプレミアムなパンチを避けるなんて。」

「……で、何？ 俺を社会の底辺みたいな目で見ちゃって。怨^{うら}みでもあるの？」

「あら、気づいていたの？ そうよ。私は貴方みたいな社会のクズがこの学園にいる事に我慢ならないの」

面倒くせえな。俺はこれからその誤解を解こうと考えているのに、そんな学園に相応しくないみたいな言い方は無いだろ。

「我慢ならないなら俺をどうしたいの？」

「貴方に決闘を申し込むわ!!」

いつの間にか周りを囲んでいたギャラリーが騒ぎ出す。ブルマ姿の

女子が川神学園の象徴である竜が描かれているワッペンを叩きつける。

「私の名前は武蔵小杉。貴方を倒すプレミアムな者の名前よ！ 負けたらここを出て行ってくれろ？」

「別に良いけど。ちなみに決闘の内容は？」

決闘と言っても内容は様々。実際にバーリトウッドウでの勝負は勿論のこと、勝負であれば何でも良い。料理、スポーツ、チェス、賭け、歌唱力でも何でもだ。学園側が認めれば極論、殺し合いでもOK。まあ学園側から容認されればの話だが。

「素手で勝負よ。どちらかが負けを認めるまで勝負を、「断る」

何言ってるんだ、この女。武蔵つつたか。百代さんほどの強さがある訳でもないのに、俺と勝負？ だからと言ってどんなに強かろうと弱かろうと女子と戦う気は無い。前にも言ったが、これは母からの遺言の一つだ。

「断るって、まさかビビってるの？ 私に負けて学園を去りたくないから断るの？ 傑作だわ！！」

まあ何とでも言え。俺はそんな勝負よりも、どうすればCクラスの皆と仲良くなれるか考えているんだからさ。

「これから『玉無しの伸二』とでも名乗りなさいよ。『玉無し』」

これは寛容さがオカン級の俺でも怒ってしまう言葉だ。女子と勝負しないだけで玉無し？ 元から玉ねえお前に言われる筋合いはねえ

よ!!

「お前、うっせえよ」

武蔵に聞こえるように、そう囁いた。俺の顔を見た武蔵は低レベルな挑発を止め、押し黙ってしまった。気丈な態度を続けて取るが、顔には恐怖の表情が浮かび上がる。

不良にも良く使った手だ。大抵人っていうのは、本来の実力とは関係無しに見た目で相手の実力を測ろうとする。だから怒りの表情で相手を怖がらせれば、こいつは強いだの自分より格上など勝手に妄想してくれる。なので俺は日頃威嚇用に、相手を怖がらせる顔を練習し取得した。

俺は誰もいない屋上を目指した。

屋上には先客がいた。

赤いバンダナを頭に巻いた男性が寝ていた。しかも涎の痕が頬にあった。一体どれぐらい寝ていたんだ？

しかし、ここ以外で昼飯を食べる場所は無いので、俺は屋上に設置してあるベンチでコンビニ弁当を食い始めた。

弁当を開けたと同時に寝ていたバンダナ男が目覚めた。んで、俺の弁当を食い入るように見つめ始めた。

「美味そうな弁当だなあ」

と言ったと同時に腹の鳴る音が辺りに響き渡った。どうやら腹が減っているらしい。

屋上で堂々と寝ていることから、この男は多分学年が上のはずだ。しかも俺の姿を見て逃げ出さないし。これはこの男と友情を深められるチャンスだ！

「良かったら食うか？」

「良いのか!？」

「ああ。腹減ってんだろ？ 今日弁当を二つ勝ったから一つ食って良いぞ」

コンビニ弁当一つだけだと俺は腹が減るので、常に二つ以上の弁当を買う。

「それじゃ、遠慮なく貰うぜ！」

もう一つの弁当をバンダナに渡して、雑談をしながら食べる。

「そーいやお前、伸二だよな？」

「そうだけど、何か？」

「やっぱりな。モモ先輩が担がれてたのをチラッと見てな」

モモ先輩、まあ普通に考えて百代さんだよな。この男、百代さんの知り合いか？

「あの時はすまなかったな。敵さんにまんまと嵌められて、お前を傷つけちゃって」

「そうか。お前もあの麻薬事件を一掃したメンバーの一人か」

「ああ。自己紹介がまだだったな。俺の名前は風間翔一。かざましょういち一応、風間ファミリーのリーダーをしている」

「また安直な名前だな」

「ま、小学生が決めた名前なんてこんなもんだろ。確かワン子とモモ先輩とは会ったんだよな」

ワン子……ああ、一子先輩の事か。一だからワンね。ある意味衝撃的な出会いだったな。まるでエロゲの展開だったし。

「他のメンバーに会ったか？」

「いや。風間さんと一子先輩と百代さんだけだ」

「そうか。なら今度の金曜日に、この前のお詫びを兼ねて来て欲しい場所がある」

「別に構わない。けど、お詫びなんて悪い。あの件は俺にも責任があるし、今は川神院に下宿させて貰っているから逆にこっちが悪い気分になる」

それを聞いた風間は、ニッと笑った。まるでイタズラ小僧が何か面白い事を思い浮かべたように。

「お前、気に入った！ 絶対に金曜日にあそこに連れて行ってやる！！ 楽しみにしているよ！！！！」

風間が残っていた弁当を口の中に捻じ込んで立ち上がる。

「それじゃ、ごっそさん！！」

そして風間さんは文字通り風のように駆け出して屋上から去った。まるで子供をそのまま大きくしたような奴だが、不思議な魅力がある。言葉では表せない、なにかこう、俺の心の隙間に入り込んで、風間さんが気に入ってしまった。たった一度の雑談で、俺は風間さんを好きになってしまった。

午後の授業が始まる鐘と共に、俺も屋上から姿を消した。

第六話 風を翔る少年との出会い（後書き）

こんばっぱー。餡子餅を食べると無条件に吐き出す御手洗団子どえーっす。

今回は風間登場です。

相変わらず展開が遅いです。ヒロインとの絡みがここまで無いまじこい二次創作はあったらどうか？

まあいいや。自分のペースで進めて行きますので、どうか今後ともよろしゅうお願いしますわ。

第七話 友達できない同士（前書き）

第四話に割り込み投稿をしましたので、見ていない人は見てくださ
い。

第七話 友達できない同士

ブルマは止めだ。思いつきで買おうと思ったが、なんと購買部の店員が若い女性だった。

おばちゃん相手にだったら買えるけど、流石に同年代程の、しかも結構好みの女性の前ではブルマを買う事しかできない。

川神院に帰る途中、百代さんとバツタリ会った。

「よう伸二」

「どうも」

「丁度よかった。伸二にちょっと聞きたい事が……やっぱり何でもない。気を付けて帰れよ」

百代さんは俺を見た瞬間、何か言いかけたが結局何も言わずに去って行った。なんだったのだろう。

しかし友達がいらないのは辛いな。中学は母さんと鍛錬の毎日で、結局不良の知り合いしかいなかった。やっぱり人付き合いが大切なんだな。改めて実感した。

取り敢えずブルマで笑いを取る案は保留。違う作戦を考えなければならぬ。何が良いか。

腕を組んで考える。例えば川神学園の生徒が不良に絡まれて、俺が助けて俺の評価が上がる、なんて漫画展開にならんもんかね。クラ

スメイトは授業以外俺の半径3mには絶対入らんし、教室を出れば廊下がガランとなるし。話す切っ掛けが少ない。

……そういえば一人だけ俺が隣の席であるのにも拘らず、逃げ出さなかった女生徒が一人いたな。

綺麗な黒緑の長い髪を左右に一つずつ縛った髪、安産型で形の良い尻、同じ一年生とは思えない発育の良い身体。そして極めつけは刀を持っている事だ。本物らしい。名前は確か、まゆずぬきえ 黛由紀江だ。

何故あの娘は俺を避けなかったのか分からない。授業間の10分の休み時間も、一人で授業の準備をして椅子に座って待機。他の連中は素早く教室から逃げ出すと言うのに。

もしかして黛も、俺と同じで友達がいらないのか？

これはラッキーかもしれん。同じ友達がいらない相手なら話題も作れるし、何よりも俺を避けない。これ程良い話し相手はいない。

早速明日話しかけてみるとしよう。相手は女子だが文句は言うまい。出来れば男子の友達が欲しかったけど。

と、早速明日話しかけようと思った矢先に、俺の直進20m先に刀を持ったクラスメイトが一人で下校していた。これは、チャンス!!

「へい、黛！ ちょっと話しようぜっ☆」

スマン。俺は変なテンションになって、黛にナンパみたいに喋りかけちゃった。

「わ、わわわわ私ですか!!」

案の定、黛はビックリしているようだ。

「うん、まあ君しかないんだけど」

俺の言葉に釣られて左右見渡して、自分しかないのを確認すると、突然黒い馬を模したストラップを取り出した。

「やったなまゆっち！ こいつはクラスメイトの伸二じゃねえか！
向こうから話しかけてくるチャンスなんて滅多にないぞ!!」

「はい、松風！ このチャンスを生かします!!」

腹話術で、ストラップと会話、だと？

この娘、どんだけ寂しい奴なんだ。なんか、塩水が目から溢れてきやがる。

「さ、西園寺さん！ お話しとはなんですか！」

メツチャ俺を睨んでる。口の端を目一杯上げて笑顔を無理に作ろうとするが、逆に怒っているように見える。

「いや、黛って、友達いないよね？」

なんか黛の顔の所為で、俺にも変な緊張が走る。

「良かったら同じクラスだし、メル友になってくれないかなあ、て」

俺の友達という言葉に敏感に反応する黛。またもやストラップを取り出した。

「ど、どうしましょう、松風！ わ、私、こんな時、何て言えば分からなくて！！」

「落ち着けまゆっち！ これは大大チャンスだ！！ これを逃したら一生友達が出来ないぜ！！」

「はい！ 粉骨砕身頑張った友達作りの努力を無にしない為に、ここで成果を出します！！」

「その意気だぜ、まゆっち！！」

どうやら一人会議が終わったようで、素早くストラップを元の位置に戻した。

「わ、わわわ、私で良かったら、喜んで！！」

ストラップと喋っている素の方が可愛いのに、対人になると酷い顔になるな。しかもストラップとの会話の声が大きくて、話している内容が筒抜けだ。

「それじゃあ、俺のメアド赤外線で送るから」

「は、はい！ ちょっと待っててください！！」

ケータイを取り出して赤外線通信の準備が始めるが、黛の方は何だかもたついている。

「あ、あれ？ 赤外線ってこっち、ああ違う！！　じゃ、じゃあこっちかな？　こ、こっちでもない！！」

どうやらケータイの扱い方が分からないようだ。10分ほどしても一向に見つからないので、黛のケータイを借りた。

「ちょっと貸して」

「あ、は、はい」

一体どこにあるのかと探し始めて数秒、メニューボタンからツールの中に赤外線通信があった。その後俺のアドレスを黛のケータイへ送った。

「はい、これでオッケー。俺のケータイに空メール送って」

「わ、わかりました」

今度は少し戸惑ったようだが、無事俺の元へ黛の空メールが送られた。するとまた黛はストラップを取り出した。

「やりましたよ、松風！　初めて家族以外のメアドを手に入れました！！」

「やったぜ、まゆっち！　これも人形相手に練習したお蔭だな！！」

「はい！　毎日100回練習した一つの成果ですね！！」

「でも、これで満足しちゃいけない。今はメル友ゲットできたから、次は普通に遊ぶ友達をゲットだ！」

「はい！　これから西園寺さんとの距離を縮められるよう頑張ります！！」

なんだか一人で盛り上がっているが大丈夫か？　ちょっと話に混ぜてみよう。

「黛、一体このストラップはなんだ？」

「はうっ！？」

驚いて数歩俺から離れる黛。まさかストラップと喋っているのがバレてないとも思っていたのか？

「こ、こここれはその、あの、――失礼します！！」

恥ずかしさのあまり突然走り出して逃げた。しかし、あの黛って子身のこなしが良いな。あれだけのスピードを維持して約100mは走りきったぞ。陸上選手のスプリント並だ。

この川神には俺の知っている可愛くてお淑やかで、^{しと}か弱い女性は一人もいないのか？

改めて川神市の女性は凄いと感じた一日だ。

第七話 友達できない同士（後書き）

面接がやっと今日終わりましたよ。一つがね。

あともう一つ、十一月の頭にあるので、これからまたまーに更新されない日が出て来ます

本当好きに毎日更新したい！！

第八話 はじめての金曜集会 其の一

戦いたい。

いつからだろう。私の欲望を抑えられなくなったのは。

戦いたい戦いたい。

心の底から、いや心に絡からまった戦闘意欲が次第に心までも侵略を始める。心が染まる。

戦いたい戦いたい戦いたい戦いたい。

私と渡り合える、丈夫で強くて私を理解する強者に会って、この内に秘めた欲望を曝さらけ出しながら、

戦いたい。

勝負戦争決闘決戦決勝闘争試合死合死闘。兎に角、拳をぶつけて、脚で蹴って、頭突いて、最後には殺し合いで死にたい。

それが私の夢。

それが私の正体。

それが私の欲望。

それが私の本望。

それが私の本質

それが私の本性。

世間なんてどうでも良い。仲間なんてどうでも良い。家族なんてどうでも良い。ただ私は、戦いたいんだ。

たとえ私が人間になれなくとも。

獣になっても。

そして、人間に戻れなくても、私は戦いたい。

今日で五日だ。

戦わなくなってた^たった五日だ。

確かに私が犯した罪の罰だ。だが、それで一カ月も戦うのを禁じるのは、私には厳しすぎる。

身体が疼く。

私が収め^{おさ}めている衝動が日が経つに連れて、疼^{うず}いて蠢^{うごめ}いて暴れて最後には、私の殻^{りせい}を突き破る。

誰でも良い。

この衝動を抑えてくれるなら、誰だって良い。

私を、助けてくれ……。

四月十日金曜朝。俺は気持ちの良い朝を迎えていた。

天気は晴れ、今日一日降水確率0%。絶好の登校日和だ！

ま、勿論未だ学校行っても話せる相手は3人しかいないけど。

百代さんと風間さんとまゆっちだ。意外と前者の二人と喋ってるお蔭で、他の生徒が俺への警戒心を解いて来てくれた。

風間さんから「俺が事の真相を話そうか？」と提案してくれたが、きっぱり断った。出来れば自分の力で誤解を解きたい。俺が付き合っていた人間関係が発端な訳であって、風間さん達はそれに巻き込まれたんだ。

確かに風間さん達にも非がある。だけど俺と風間さんはもう友達になって、それまでの経緯をチャラにしたんだ。だったら以前の自分の身から出た錆さびは自分で後始末をする。最初から貸し借りのある関係にしたくないんだ。

最初は飽くまでも対等な関係で、相手の事を理解することを第一にする。その後、互いに困ったことが在ったら互いに利益に関係なく助け合う。これが俺の友人関係の理想だ。

だから今は助け合う時ではない。これくらいの事は自分でどうにかするさ。

しかし、この頃の百代さんは何か大人しい。出会った頃と違い、何か自分の内に溜めこんで、それを吐きだせずに我慢しているようだ。本人に遠回りに訊いてみたが、全然答えらしい答えが聞けなかった。どうやら風間さんも知らないようで、毎日百代さんはバイトに明け暮れている。

仲間内にも話せないものを百代さんは背負っている。背負わざる終えない状況に置かされている。

百代さんの性格から察するに、相談したくても相談できないんだ。

ならそつとしよう。

ここで助け船を出しても、百代さんには苦痛にしかならないと思う。俺の当てにならない直感がそう伝えてくれる。

ここは見守るしかない。百代さんが限界に、手遅れになる前に助けるまで。

「へいへいへーい！ まゆっち一緒に昼飯食おうぜ！！」

「は、はい、シンくん」

隣の席にいるまゆっちの席を俺の席と合体。互いに弁当を広げる。

黛からまゆっちへの渾名へ、伸二がシンくんに移行したのはつい先日、互いに渾名で呼び合った方が友達らしくていいとまゆっち案。しかし表情は硬いままだ。たまに俺との会話で素の笑顔を見ることがある程度

昨日からクラスは段々と明るくなってきた。俺が無害であると気が付き始めたんだ。

茶髪の方は何とか俺が自宅まで謝りに行って登校してきたが、髪を黒髪に戻してピアスも取って普通の姿になった。

もう片方は手遅れで、学園で漏らしたことがショックで遠くの学校に転校してしまった。申し訳ない気持ちで一杯だ。

『ハアイエブリバディ、今日は残念な知らせだ。今日のLOVEかわかみは休止です。川神百代さんの体調不良が原因です。体調不良というのは建前で、実は今日の百代さんは機嫌が悪いんだ。皆も百代さんに会ったら下手な行動をしないように。俺なんかただ少女についての魅力を語っただけで怪我しちゃったよ』

それは井上が悪いだろう。井上の少女趣味はもはや犯罪の域だからな。逆に抑制だけですんで良かった。下手すれば警察のお世話になる。

「お、そのハンバーグ美味そうじゃん。まゆっちが自分で作ったの？」

「はい。全部お手製ですよ」

「お手製良いよね。コンビニの弁当では味わえない家庭の味が俺は好きなんだけど」

生憎俺のキッチンあいにくは改善作業で忙しくて使用どころか進入禁止。普段は経費削減の為にコンビニ弁当は滅多に食べない。

「一欠けら食って良い？」

「はい。取って良いですよ」

そう言ってまゆっちは弁当を俺に差し出す。弁当箱の中の小さく切り分けられたハンバーグを一つ取って口へ運ぶ。

「――う」

「あ、お、お口に会いませんでしたでしょうか！ 申し訳ございません！」

「うめえじゃん！！ これお母さんが作ったの？」

「え？ ええ！ 美味しいです、か」

「ああ。メツチャ美味しい。冷めているのに肉汁が口の中に溢れてくる。何を入れてるの？」

「じ、実は鳥ひき肉を入れてました。鶏肉の肉汁は人間の体温で解けるので、冷めても肉汁が溢れる仕組みとなっています」

成る程。鶏肉か。今度弁当を作る時に試してみよう。

「やったぜまゆっち！ 伸二の好感度がアップだ！！」

「はい、松風！ 普段から弁当を作ってた甲斐がありました！！」

なんだかまゆっちと松風の腹話術も慣れたな。最初どんな自作自演だよと突っ込んでいたけど、松風はまゆっちが出せる本心でありもう一人のまゆっちなんだ。内気な性格が造り出した理想の自分の姿の一つだと俺は考える。

「よ、よよ良かったら他にも食べませんか？！」

テンパった様子でまゆっちが俺に他のおかずも進める。

「大丈夫だよ。これ以上俺が食うとまゆっちの分が無くなるだろ？」

「で、でわ、こ、ここここお、これから私が、べ、べんちようを作ってきたショーカ！」

所々囁んでいたが、話の内容は理解した。これからまゆっちが弁当を作ってきて来るかどうかという事か。

「いや、遠慮するよ。そう言うのは彼氏が出来たら、彼氏にしてあげろよ」

「彼氏？！ そんなもの私にいません！」

「うん。わかるよ？ いたらまず俺と昼一緒に食べないでしょ？」

なんだか余計テンパってしまったな。まゆっちに友達の親睦を深めるために弁当を作ってくれると言ってくれたのかな？

その後、まゆっちとの他愛も無い話に花を咲かせ、本日のメインイベントが待ち受ける放課後へと時が進んだ。

第八話 はじめての金曜集会 其の一（後書き）

ども、おてあらいだんごではございません。みたらしだんごです。次回、其の二で風間ファミリーが総出演を果たします。では、また次回会いましょう

第九話 はじめての金曜集会 其の二

風間さんに言われて町外れのとある廃ビルへやって来た。

ここで、金曜集会なるモノを風間ファミリーでやっているらしい。

本日風間さんはバイトらしく、俺一人で来た。一子先輩や百代さんもそのメンバーだが、百代さんは不特定多数の美少女を侍らせながら欲求解消だと言い残して消え、一子先輩は鍛錬を一通りし終わった後に来るらしい。

バイトが終わった風間と共にここに来る予定だが、少しこの集まりに興味を持ったので、下見に来た。

流石に集まる部屋までには行かない。今回は道筋の大体のルートを確認に来た。

結構大きなビルだな。学生の集まりだから、てっきり小さな小屋だと思っていた。

ビルから一人、誰か出て来る。白い学生服に紺のズボンから男性であることが分かった。

中肉中背で平凡的な体格だ。顔も普通の中の普通。俺が今考えたベスト・ザ・普通・イヤーに輝くだろう。

「うわあ！ 西園寺伸二！？」

目が合うと同時に驚きの声を上げる男性。酷く怯えた様子で、俺と

の距離を取る。

「ま、まさかこの間の腹癒せに、ここまで来たの？」

「んな訳無いだろ。俺がそんな酷い人間に見えるか？」

男性は俺の頭の先から足の先までじっくり見たあと、深く頷いた。
ちよつと傷付くぞ。

「だ、だって君って、少なからず麻薬取引をするような人たちと親交があったんでしょ？」

「俺がヤク使っているように見えるか？」

「見えないけど、掲示板を見る限り君は麻薬中毒者みたいに書かれているよ。普通そうに見えて、学園の屋上でやってるって」

「くくく、そうそう。この白い粉をスプーンの上に少量乗せて、下からライターで炙るんだ。^{あぶ}

んで、トロトロつとしてきたら、注射器でポンプして中に入れるんだ。

それから腕の脈が浮き出るように、腕を紐で縛るんだ。

俺ぐらいの常習者は打ち過ぎて肌が硬くなるからな。柔らかいとこを探して、静脈に刺す。

初心者はここで打ちまうようだが、まだ早い。

一旦血液を吸い込んで、注射器の中で溶けた白い粉と混ぜるんだ……。

最後に……体内に……押し込む……。

ああ……ああああ！……くぁ………あああつふ……。

お、おれはあ……さ、……最強の、せんしだ……。

ああああああああああああああああああああああああ！」

俺なりにジョークを言ってみたんだが、どうやらこの男性はお気に召さなかったようだ。

「や、やっぱり常習者だ」

「ジョークだよ！ ジョーク！！」

「なんか描写がリアルだったけど？」

「なら俺の腕を見ろ！ 注射針の痕なんかねえぞ！」

俺は制服を脱いで腕全体を見せつける。それを見てもまだ疑った視線を浴びせ続ける。

「モロが制服を肌蹴出した見知らぬ男性に言い寄られている。ゴクリ」

「ちょっと京！^{みやこ} 何そのBL的妄想！」

突然俺の背後に現れたこちらも見知らぬ少女。

結構小柄の体系に似合わずスタイルが良い。短い髪で顔全体がハッキリ見えて、一見清純そうに見える。

「さあ、私に構わず続けて」

「そうか。ならモロ、覚悟は良いか？」

俺は更にベルトを緩めて、男性の顔に手を添える。

「なんで乗り気なの！？ 僕、そんなアブノーマルな趣味無いよ！」

俺の手を叩き落として、凄まじい速さで距離を取る。

「俺だってねーよ糞野郎！！ ただこの場の雰囲気に乗っただけだ
つつーの！！！！」

「なら止めようよ！！ 誰も幸せにならないよ、この展開は！！」

「私は幸せになれる」

「だってさ。諦めろ」

「なんで君は諦めてるの？！ ノリでやるレベルじゃないよ！！」

うん。まあこの辺で勘弁してやるか。流石に悪ノリしすぎた。

「冗談は置いといて、お前ら、風間ファミリーの一員か？」

下で自己紹介を済ませ、俺は秘密基地の部屋まで案内された。

内装は意外と綺麗でこの部屋だけ改装されたようになっている。机を中心に三つのソファが並び、二つほど棚がある。棚の中には小説、ライトノベル、漫画、ゲームの攻略本など多々ある。電気は通って無いらしいが、秘密基地としては豪華すぎる。

「ごめんね。まさかキャップの紹介で来たなんて知らなかったよ」

先程の男性は師岡卓也（もうおか たくや）と言うらしい。俺の一つ上の先輩で、所謂オタクだ。ここにある漫画は大抵この男が仕入れてきたんだと。漫画をざっと見たが、俺と趣味が合いそうだ。

「なんだ。キャップの紹介か。てっきりモロに一目惚れしたのかと思った」

このBL趣味丸出しの少女は椎名京（しいなみやい）。同じく二年生。こちらはBL趣味以外だと、大人しい普通の少女だ。顔も可愛い。実は俺のタイプだったりする。

「はい。みんな、飲み物が出来たよ。伸二はコーヒーミルク入りで良かったよね？」

「あ、ああ。ありがとうクッキー、さん？」

俺にコーヒーを淹れてくれたこの人物、というかこの物体の名前はクッキー。卵に手脚が生えたような形をしている。胸元には電子レンジの扉程の小さなドアがある。

「呼び捨てで良いよ。僕、さん付けは慣れてないからさ」

なんとまあ高性能なロボットで。どこで造られたか聞いてみたら、かの有名な九鬼財閥だど。あの財閥は本当に色んなモノに手を出しているんだな。流石世界の九鬼財閥と謳っているだけある。

俺が一口コーヒーを飲むのと同時に、一人の男性が入室した。

「あれ？ 今日は見慣れない奴がいるな」

こちらモロさんに似て中肉中背だが、若干身長はモロさんより勝っている。顔もイケメンだ。風間ほどではないけど。

第一印象としては、ヤドカリが好きそうな顔をしているな。いやマジで。

「どうも。風間さんから言われてここに来たんだ。名前は西園寺伸二」

「西園寺って、ああ。この間のか。あの時はすまなかったな。しかし姉さんにヤラれたにしては、元気だな」

「ん、まあ川神院の人に介抱されて貰ったし、そんなに深いダメージを喰らってなかったんだ」

「そうか。なら良かった。俺の名前は直江大和。モロや京と同じ二年だ。よろしく」

そう言って俺に右手を差し伸べる。俺も右手を出して、握手を交わ

した。

その後、大和さんとモロさんの連絡先を交換して、軽く親睦を深めるために二人と談笑を始めた。

椎名さんは読書をしながら、大和さんの隣で大人しく座っていた。

第九話 はじめての金曜集会 其の二（後書き）

ふう。御手洗団子です。

すいません。前回言った風間ファミリー全キャラ登場できませんでした。

つーか忘れてました。ガクトの存在をw

次回こそ、風間ファミリー全キャラ登場させます！！
以上！！

第十話 はじめての金曜集会 其の三

「椎名さんは大和さんの未来のお嫁さん？」

大和さんとモロさんと話が弾むに連れて、たまに椎名さんが口を出すようになった。

女性の話になってから、というか大和さんに彼女がいるかどうかの話題になった瞬間、椎名さんの口からトンデモナイ言葉が出て来た。

「そう。私は身も心も大和に捧げたの」

「断じて違う。事実無根の京の妄想だ。絶対に違うからな」

顔を赤らめている椎名さんに斜め45度からのチョップを叩く大和さん。まるで壊れたテレビを直す作業だ。

まあ客観的に見て、椎名さんは大和さんにぞっこんフォーリンラブと言ったところか。

そんな光景を笑いながら見ているモロさんは、なんだか大和さんを羨ましがっているようだ。彼女が欲しいのかな？

「羨ましいなあ。そんな可愛い子に言い寄られたら、俺だったら即付き合いますね」

「俺はそんな軽率な男じゃない。俺にだって好きな人くらいいる！」
おっと、ここでまさかの第三者の出現。これは昼ドラ並のドロドロ

した三角関係が出来るのか。

「へえ。大和にも好きな人がいるんだ。それって誰？ 僕達の知っている人？」

「うん。私も聞きたい。大和、一体誰と不倫したの？」

意外にも大和さんに最初に特攻したのはモロさんだ。それに続いて椎名さんも援護しにきた。

「べ、別に誰だって良いだろ！ 個人の自由だ！」

「西園寺くんだって聞きたいよね？」

おっと、ここでまさかの椎名さんからの救援要請。どうする？ ここで重要な選択肢としては、？大和さんの援護に入る。？大和さんを追撃。？面倒だから中立を装うのどれかだな。

「……正直聞きたいです」

椎名さんは右手の親指をサムズアップ。俺も右手の親指をサムズアップ。

「さあ大和。三対一でこちらが有利よ。観念しなさい」

「一体いつから多数決で俺の好きな人を話すかどうかが決まってるんだよ！ 絶対ここでは喋らないからな！」

往生際の悪い奴だな。別にここには女性は一人しかいなくて、しかも他に好きな人がいるなら本人に聞かれる訳では無いのだから、話

しても良からうに。

……いや待てよ。大和さんがノーマルだと誰が言った？ この世にはゲイやオカマや両刀バイが存在するんだ。男性好きの男性の可能性が十分にある。ここには女子が一人だが、男子は二人いて、中々話さない。そこから導き出される一つの答えは――

「――もしかして大和さんって、モロさんの事が好きなんですか？」

「な！ そんな訳無いだろ！！」

「だってここで喋らない＝好きな人に聞かれる可能性がある。だから京さんの事が好きなら、既に付き合っているはず。なら残っているのは俺とモロさん。俺は今日会ったから論外。なら最後に残される可能性は」

「確かに。その可能性、否定できない」

「おい京！ なにマジで受け止めているんだよ！！ 俺はノーマルだ！！ おいモロ！ お前も顔を赤らめるな！ 俺にはそんな気は毛頭も無い！！」

「大和、僕にはその、そんな趣味無いから」

「だから違うって！ 俺にもそんな趣味はないよ！ しかも何で勝手にモロに振られてるんだよ！」

「そういえば、昔の人は偉いこと言いましたね。愛があれば性別は関係ないって」

「止めろ西園寺！　どんだけ俺をそっち側に落としたいんだ！！
何度も言うが、俺はノーマルだ！！！！」

「大丈夫ですよ。最近はテレビでも同性愛者の芸能人が増えていますから」

「全然フォローになってないよな！　西園寺、一応先輩だぞ？　分かっているのか？」

「分かってますよ。尻を貸す、以外なら何でも承りますよ^{うけたまわ}」

「やっぱりわかってないだろ！！」

「男なら許す！」

「何が許すだ京！　さっきから言っているように、俺は姉さんが――」

しまったと口を塞ぐがもう遅い。誰が好きなのかここに居る全員にバレてしまった。

上手い具合に口を滑らしたな大和さん。まさかカミングアウトをしてくれるなんて思ってもいなかった。

しかし好きな人は百代さんか。ハードル高いぞ。色々な意味で。

「オーッス！　ってなんだ、今日は知らねえ奴がいるじゃねえか」

大和さんの口を滑らしたのと同時に、デカイ男が部屋へ入って来た。

身長は190弱でかなり大きい。しかし、残念な事に足が短い。顔の造りも男臭すぎて、これでは全然モテないだろう。

筋肉がガッチリしていて、細マッチョブームに逆行した体系。髪型もダサイ。

デカイ男登場と同時に、大和さんが俺、モロさん、椎名さんにアイコンタクト。さっきの事を忘れろ！　と言っているのだろう。

モロさんや椎名さんは大和さんにアイコンタクトを返す。何か要求をしているみたいだ。それを大和さんは渋々（しぶしぶ）OKを出した。

「初めまして。俺の名前は西園寺伸二。一年だ。今日は風間さんの紹介でここに来た」

「ほう、そうか。俺様は島津岳人だ。よろしくな！」

俺様……そんな一人称がまだ残っていたのか。どんだけ自分が好きなんだろう、この人。

「どうだ西園寺、この髪型は。すごく決まってるだろ？」

ガクトさんの髪型は、まるで雑誌に載っているモデルのようにヘンテコな髪型をしている。この風格と顔ではミスマッチすぎる。

「はい。（ある意味）決まっています」

「だよなあ！　ほら見ろ大和！　やっぱり、お前の感覚がズレているんだよ！」

「ガクト、お世辞だつてことに気付いけ。下級生だから遠慮しているんだろう」

「なに！ そうなのか！？」

「いえいえ、ガクトさんの髪型が（ある意味）決まっているから、今日は女子の視線ビンビン感じたでしょう？」

「おうよ一年！ 見る目が違うな。今日はすれ違う女ほとんどが俺を二度見したぜ！ やっぱこのモテモテ本は効果絶大だな！！」

ヤバイ。笑いを堪えられないかも。顔に似合わないオシャレ髪型だったら、誰だって驚きのあまり振り返るであろう。しかもなんだ、この自費出版で出したような安っぽい雑誌は。絶対に騙されてる。

「しかもこの本にはまだまだ沢山のモテる裏技が載ってるんだぜ。例えば電車で隣に座る女性をナンパする秘訣や、道に迷っている女性のカッコいい道案内があるんだぜ！ 西園寺、これ読み終わったら、お前にも貸してやるよ」

「あ、ありがとうございます」と俺は肩を小刻みに震わせながら返事を返した。ホントにヤバイ。面白すぎる。この人、絶対女性にはモテないだろうな。男なら友達としてアリだけど。

そんな時に救世主。川神姉妹がようやく到着した。

「あれ？ なんで伸二がここにいるの？」

「いやースッキリした。やっぱり美少女と戯れるのが一番の欲求解

消だな」

これで風間ファミリーは風間さん以外全員終結した。事前に聞いたメンバー7人と人数が合う。

「あ、どうもどうも一子先輩に百代さん！ さあここに座って談笑でもしましょう！！」

その後風間さんがバイトが終わるまで各自、他愛の無い会話や、自分の趣味に没頭するのであった。

第十一話 はじめての金曜集会 其の四

日は暮れ夜空に月がくつきりと見える頃、大和さんと談笑中、外からバイクのエンジン音が聞こえてきた。多分、風間ファミリー創設者風間さんのバイクの音だろう。前に一度風間さんがヤマハのバイクに乗っていたのを記憶している。

「いてっ。……ん？ この音は、キャップか」

百代さんに弄られていた大和さんも気付いて、窓の外に目をやった。

「ああ。間違いないな。この楽観的な“気”は」

流石百代さんです。人を漫画で出るような“気”で判別できるのは武神の百代さんだけです。

ついでにキャップというのは仲間内での風間さん専用ニックネームだ。由来は小学校から付け続けているバンダナから来たらしい。

「ウィーッス！ 皆待たせたな！」

ドアを壊れんばかりに開けながら風間さん入室。両手に白い袋を二つほどぶら下げている。

「おお伸二、来ていたか。うんうん。今日来たばかりなのに早くも馴染んでいるな」

そう言って風間さんは窓際のソファー中心部に座る。どうやらそこが風間さんの特等席らしい。

「待ってました！ 今夜の晩ご飯！！」

一子先輩は餌を待ち侘びた犬が、餌を持った飼い主に寄り添うように風間さんに駆け寄った。餌付けすれば色々出来るかな。

「相変わらずだなワン子。ま、全員揃っているようだし……始めるか」

ドンツとテーブルに荷物を置く。その中には大量の寿司と蕎麦があった。

「今日は大量ね」と大喜びの一子先輩。

風間さんが荷物を置いたと同時に、皆さん各々の作業を中断してテーブルを囲むように集まる。どうやらここで食事を皆で取るらしい。

「それじゃあ頂きますの前に、皆に提案がある」

寿司に手を伸ばしていた一子先輩の手が空を切る。今の一子先輩の心境は食事を前に待てを要求された主人に従順な犬だな。

「皆も薄々気づいているだろうが、この一年の、西園寺伸二を風間ファミリーに入れようと思う！！」

突然だ。まあ皆さんも大体予想していたのか、あまり驚いていなかった。

「この前伸二と話す機会が在ったんだけどさ、こいつ意外と良い奴なんだよ。俺気に入ったんだ。で、皆にもこいつの良さを知って貰

いたくてここに呼んだんだが、どうだ？」

皆さんそれぞれで軽く思考を巡らす。と、そこに大和さんが横やりを入れた。

「皆に聞く前に、伸二自身に聞いた方がよくないかキャップ」

「それもそうだな。伸二、ここに数時間いてどんな気分だった？」

おっと、皆の視線が俺に集中してちよつと恥ずかしいぞ。まあここは思ったように話すか。

「えっと、俺的にはここにいて、結構楽しかったです。秘密基地としてはかなり多くの娯楽道具があつて飽きないし、何より先輩たちとの雑談も面白いから、出来ればここにいてみたいです」

言った。言ったぞ、俺の本心を。

「だそうだ、皆。俺もこいつと同じで、伸二をここにに入れてみたい。ここからは俺たちの意見の発表だ。まずはモモ先輩から」

キャップに促^{うなが}されて百代さんが口を開いた。

「私は賛成だ。伸二を入れることは。……言って置くがこの決断は私の意志で、決してこの間の罪滅ぼしではない。伸二が風間ファミリーに入っても楽しくやっていけると私が判断しただけだ。以上」

百代さんが言い終わった直前に次々と口を開く。

「俺様は賛成だ。伸二は見所がある後輩だ。俺様の良さを全部理解

してくれている」

「……岳人はからかわれているだけだろ」

「大和、俺や伸二がモテモテになっても妬^{ねた}むんじゃねえぞ」

大和さんの的確なツツコミが岳人さんの耳にはこの日伝わらなかった。

「私は、伸二君が楽しんでくれるなら賛成、かな」

「俺も本人が良ければ言いと思うが、」

なんと大和さんと一子先輩が賛成に一票を投じてくれた。この時点で殆どの人が俺を受け入れても良いと。

しかし、ここからが山場だった。

「京はどうだ。伸二が風間ファミリーに入るについて」

「普通に反対」と端的に発言する椎名さん。

「今までもこのメンバーでやってきたし、これ以上は必要ないと思う」

メツチャバツサリ切り捨てられた。本人目の前にいるのに。いや、逆にこれぐらいぶっちゃけてくれた方が良い。気を使われて本心を言わないで、陰で悪口言われる方が嫌だ。

「僕も反対かな」と反対が二人となった。

「賛成五人に反対二人。多数決ならこれで決まりだが、少数派の意見も尊重しないと。そこでキャップ。一つ提案がある」

と。

ここで川神学園一の軍師と名高い大和さんが語り出した（先程の雑談中に聞いた情報）。

「提案？」

「ああ。このまま風間ファミリィに入れても、伸二の行動や言動一つがファミリィの雰囲気悪くする可能性は少なくとも0ではない。だからここは部活で云う『仮入部』的なポジションとして傍で一緒に遊ぶ。そして、モロや京が納得したら伸二を正式に風間ファミリィに入れ、逆にずっと反対派の意見が変わらなかったら入れない。これでどうだ」

大和さんの意見はごもつとも。これは政治や経済の問題ではないので、多数決では決められない。こういった仲良しグループは、多数の意見を尊重するのではなく、少数派の意見を大事にするのが常識。多数派の意見を押し通せば、少数派はグループを離れてしまう。

そして最終的にグループはバラバラ。対立やグループの解散に繋がる。

なので如何に少数派を納得させて、多数が全員になるようにしないとならない。

大和さんの提案を聞いたモロさんと椎名さんは、渋々といった感じ

で返事をした。

「それなら良いけど、もし『ある言葉』を西園寺が言ったら、排除するよ」

殺意すら覚える瞳で俺に威嚇をする椎名さん。どうやら風間ファミリーには禁句タブーがあるらしいな。ま、皆目見当は付くけど。

「よし！　なら決まりだ！！　伸二は今日から風間ファミリー見習いだ！！」

こうして、今日の金曜集会は風間ファミリー見習い歓迎パーティーとなった。

第十一話 はじめての金曜集会 其の四（後書き）

久しぶりの投稿の御手洗団子です。

いやあ久しぶりすぎてオリ主の伸二の口調を忘れてしまいました。

まあ元々場の雰囲気で口調が変わる奴なので多少はどうでもいいかなあなんて思ったり。

そんなわけで今回ではじめての金曜集会は終わりです。

次回は、お待たせしました、我らがヒロイン辰子の再登場です。
ではまた次回にお会い致しましょう

第十二話 深夜の密会

金曜集会が終わり、川神院に帰って来た一子は本日最後の鍛錬を積みに行き、百代は鉄心の部屋へと向かっていた。

障子の戸を開け、百代の目に祖父であり川神院トップである鉄心がいた。

百代はかったるいなど思っているのか、荒々しく鉄心の前で胡座あぐらをかいた。

その行動にも目に止めずに鉄心は話しかけた。

「モモ。あれから数日経ったが、何か考えはまとまったか？」

可愛い孫を心配してなのか、百代に優しく接する鉄心だが、そんな気遣いも虚しくむな百代は答えた。

「別に。考えようにもバイトで時間を取られ、欲求不満で自分の感情が吹っ飛びそうだ」

明らかに百代はイライラしていた。やはり戦えない事からくる欲望は、女性漁りなんかで解消できるはずもない。

「ジジイ。用が無ければ部屋に戻っても良いか？　ここに居たらジジイと戦いたくなってしまうだろう」

今の百代には鉄心しか見えていない。実の祖父でも拳を振るうのに躊躇ためらいが無いとみられる。

百代の目は猛禽類の目だ。目の前の獲物を捕らえる直前の鋭い眼差し。その瞳の輝きは到底人とは考えられないほど濁っている。

野蛮人だ。

自分の欲しか考えられない、自分の欲を抑えられない、自分の欲が最優先の野蛮人。

「そうか。ワシと一緒に居るのが辛いならここを去っても良いが、モモ、しつこいようだが――」

「人と戦わないよ。それだけは約束する。伸二への罪滅ぼしが終わるまでな」

そう言い残し、百代は鉄心の部屋を迅速に出た。

「ふむ。思っていたより絶えておるのう。これが切っ掛けで戦い以外に興味を持つと良いが」

「そうですかね。俺は無理に耐えすぎて爆発して手当たり次第に人を襲わないか心配だ」

鉄心はギョツと驚いた形相で後方を振り向いた。が、誰もいない。

できるだけ音をたてないように着地をする。うむ。我ながら良い着地だ。

「貴方は百代を戦いから遠ざけて、色んな世界を見させようと考えているでしょうが無駄です。あの手の人間は、敗北を知らなければ

何も変わらないし、変わろうとはしない」

「いつから聞いていた、西園寺伸二」

「いつからって、百代が来る数秒前にはここにいました。主に屋根裏に」

そう。

俺は屋根裏で気を絶ちながら、息を潜めて二人の会話を盗み聞きした。

近頃百代の様子がおかしいので、ちょっと調べたらあっさり出てきた。が、なるほど。鉄心が一枚噛んでいたわけだ。

「しかし百代も律儀ですよね。自分の罪を認めて俺に罪滅ぼしなんて」

まったく。背負うなよ。つか背負わせるな、一人の女性に、女の子に。

勝手に背負わされる身にもなれや。辛い宿命を背負うな。

「そこで一つ、俺から提案がある」

「ほう？ 提案とは面白い事を言うな少年」

「そ、面白い事」

なんて言いながら、多分俺は顔がニヤけていただろう。

「俺は近い将来、川神百代を超えてやる」

武神に対して、なんて無謀で、なんて烏滸^{おこ}がましく、なんて現実味の無い言葉であろう。

これに鉄心は感心したのか厭^あきたのか少し思考が停止していた。

「今はアンタや百代から見ればただのひよっこだが、此処が俺の限界だと思っちゃいない。まだ伸びしろがあると自分でも思う。現に俺は百代に会うまで、自分は誰にも負けない自信があったが、百代に呆^{あっけ}気なく綺麗サッパリ粉々に壊された。慢心していたんだ。その慢心が俺の敗北の原因だ」

俺は続ける。

「母が死んでから俺は慢心のあまりに自分への鍛錬を甘くしていた。どうせ母もいない、俺より強い奴はいない。そんな思いはこれから無くして、チャレンジャーとして川神に挑^{いど}みたい」

さらに続ける。

「だから戦わずに体が鈍っている百代に戦いを挑んでも、面白くない。今すぐは無理でも、近いうちに鈍らないように他の奴と戦えるようにしといてくれ。それがアンタの言う、俺への恩返しだ」

鉄心は口の端をニツと上げる。

「ほう。戦うにしてもどうやって百代に勝つ？ モモは今のワシですら勝てるかどうか、怪しいもんじゃ」

「決まっているだろ」

俺はキメ顔でこう言った。

「一子先輩みたいに毎日の地道な鍛錬で少しずつ鍛えていくさ。近道はそれしかない」

人は、漫画みたいに突然強くなる訳では無い。

強い人間は、毎日気が遠くなるような努力の末に、その強さを手に入れるのだ。

俺が母と生きてきて最後に知った、強さの真実だ。

鉄心は伸二が去って、しばらく笑い続けていた。

「ほっほっほっ。まさかワシが気付かないほど気配を消せるとは、流石あやめの子、としか言いようがないのう」

久しぶりに背後を、いや真上を初めて取られた。と嬉しそうに呟く。

「実力はまだまだにしても、良い身体に、良い心をしておる。伸二が百代と全力で戦う日が来ると思うと、楽しみじゃ。長生きはするもんじゃ」

しかし、と呟きは止まらない。

「気配が、気が感じられなかった。現れるまでずっと……。それに、奴の本心にようやく会えたようじゃ」

空は曇り月の光で照らされない暗闇の夜。小さな火が灯^{とも}った夜の出
来事だった。

第十二話 深夜の密会（後書き）

はいはいどうも御手洗です。

えー、今日が伸二の本性とも呼べる時の口調を書きました。

普段の伸二はその時の気分で口調が変わりますが、これが本当の口調で性格です。

しばらくはこのモードで登場する機会はありません。

適当な口調で適当な奴ですが、どうぞよろしくお願いします。

第十三話 まゆっち、気になる人がいるの巻

早いもので、俺の部屋を襲撃されてから一週間が過ぎた。

休日明け最初の授業なので、気怠さ満開。正直今日は午後から授業を受けたい。

昨日は風間ファミリーと適当に秘密基地でだらけたり、屋外で野球などをして遊んでいた。

この程度なら、まだ気怠くはならない。問題はその後だ。

学園長にあんなことを宣言したからには、いつも以上の鍛錬を行わなければならない。

晩御飯の後に鍛錬は勿論、今日も朝早くから体を虐めてきてやった。

慣れていない朝晩の二回の鍛錬に体がまだ着いて来ない。一か月は続けないと身体は慣れてこないな。それまでの辛抱。

はあ。一気に時が経たないかな。こりゃ百代さんと戦うなんて数年越しになってしまう。

多摩川の河川敷を沿いながら歩いていると、なんと腰にタイヤを付けた一子先輩が走っている。

タイヤの大きさは乗用車並みなのでそれ程重くないにしても、常人が走るスピード位で走っている。

練習熱心というかなんというか。何が目的であそこまで努力が出来るのか知ってみたいな。雑談でもしてみるかな。

「一子せんぱーい！ おはようございます！！」

俺はまだ風間ファミリーの見習いなので、先輩達みたいに犬笛を持つてはいない。だから大声で呼ぶ。

いや女子を犬笛で呼ぶのも抵抗は在るから、貰っても使用しない。

俺の呼び声に気付いた一子先輩は、迷いも無く俺の元へ駆けつけてくれた。可愛い先輩だな。

「おはよう伸二君！ 今日も良い朝ね！」

太陽のように明るい笑顔で挨拶を返してくれる一子先輩。話し易くて助かる。

「はい。良い朝ですね。今日も鍛錬に精が出ているようですねによりです」

「それはそうよ。一日でも早くお姉さまに近づけるように、一生懸命鍛錬しているんだから！」

百代さんが目標、か。俺とは違う意味の言葉だな。

俺が百代さんを超えるのが目標なら、一子先輩は百代さんに成れるのが目標。

なんとも可愛く健気な目標だ。憧れの人になりたいなんて。

「早く目標が達成できると良いですね」

在り来たりな言葉で応援の言葉を言う。

「ありがとうね、伸二君」

満面の笑みで感謝の言葉を述べる一子先輩。なんつーか、俺には眩しすぎる笑顔だな。

「それじゃあ私行くわね！　またあとで！」

ゆうおーまいしん、ゆうおーまいしん、ゆうおーまいしんと鍛錬に戻った一子先輩。

「お、おはようございます、シンくん」

小さくなる一子先輩を見送っていると背後から俺を呼ぶ声が聞こえた。

まゆっちだ。

普通なら銃刀法違反の犯罪者にしか見えん時代錯誤の武士娘。ちょっと調べたら、あの剣聖と呼ばれる黛十一段の娘だと。我ながら凄い友達を獲得したな。

「ういっす。まゆっち。今日も良い天気だな」

「ハ、ハイ！　トッテモイイテンキデスネ！！」

片言で顔を真っ赤にして強張った顔をしている。相変わらず対人強度が低いな。まあこれでこそまゆっちって感じがする。

「まあ学園はすぐそこだし、一緒に登校しようぜ」

「え、ええええ!! い、いいいい一緒に登校ですかあああああ
あ!!」

驚きのあまり逃げ出そうとするまゆっちの手首を掴んで動きを制する。驚き過ぎだろ。

「友達なんだから一緒に登校は普通だろ？」

「い、いやあのその通りですが私にもあの心の準備というものがありました」

「今更何言ってるんだ。対人耐性を強化せにゃならんのに、一緒に登校も出来ないようじゃ俺以外に友達出来んぞ」

「伸二の言う通りだぜまゆっち」

あ、松風が出て来た。

「わ、わかりました。では一緒に行きましょうか」

とまあこんな具合にまゆっちと登校する事になった。

が。

話題が無い。

しかもまゆっちは自分から話すタイプではないので、俺から話題を振らないといけない。

「まゆっちって何か趣味とかある？」

「しゅ、趣味ですか。強い^しと言えば料理です」

「へえ。女の子らしくていいな。家庭の調理実習の時に活躍できるじゃん。そこで手際良く熟せば友達出来るかもな」

「はい！ その時は頑張ります！！」

前からわかっていたけど、やっぱり料理が得意なのか。調理実習の時に同じ班になれば楽できるな。

「と、ところでその、シンくん。ちょっと聞きたい事があるのですけど」

「なんだ。そんな改まって。……いやいつも改まっているな」

真剣そうな顔のまゆっち。何か悩みでもあるのかな？

「その……ちょっと気になる人がいました」

「まさか恋愛相談とは……彼女いない歴〓年齢の俺に聞くなんて鬼畜の所業だな」

「ち、違います！！ 気になっている人は女の人で――」

「まさかのまゆっち百合百合宣言！」

「え！ まゆっちそうだったの！？ オラを差し置いて女に走るなんて！！」

いや、そこ松風も驚くところなのか？

「そ、それも違います！！ その、友達になりたい人がいるんです！！」

ああ。そういうことね。まゆっちが禁断の同性愛者なんて展開だったらどうしようかと一瞬考えちゃった。

しかし、友達が欲しいと言われても。

「無理だろ」

「ええ！！」

「だって俺に対しての会話ですら緊張しているのに、他人の、しかも何の接点も無い人とまゆっちが真面まじめに喋れるか怪しいものだ」

そう言われてグサツと心に見えない矢が刺さるまゆっち。落ち込んでしまった。

「そう落ち込むなよまゆっち。今は無理でも、訓練して会話に慣れれば自然と友達が出来るって」

「ほ、本当ですか？」

上目遣いで涙目の瞳で俺を見つめるまゆっち。なんだこの可愛い小動物は！ 持ち帰らせてえ！！

「あ、ああ勿論だとも。幸い俺と云う友達もいるんだから、頼っても良いぜ」

まゆっちはぱあっと表情が明るくなる。やっぱり女の子は誰でも笑っている顔が一番いい表情だな。

「あ、ありがとうございます。シンくん」

ぺこっと斜め45度の最敬礼を綺麗に決めるまゆっち。

親しき仲にも礼儀あり。という言葉はまゆっちの為にあるようなものだと感じた朝であった。

第十三話 まゆっち、気になる人がいるの巻（後書き）

結構長いあとがきを書いてタイトルエラーで消えてしまった御手洗団子です。

何やってんだ俺！ もうあんなに長い文書きたくねえよ！！
そんなわけで今回のあとがき終了。お疲れ様でした。

第十四話 眠れる河川敷のお姉さん Part 2

今日は先週と同じく俺は殆ど一人で過ごしていた。

まあ唯一変わった事は風間ファミリーと出会ったら雑談程度に話すくらいだな。

モロさんとも話したけど、別に俺を毛嫌いしている訳でもなさそう
だ。漫画の趣味も合って話しやすいし。

単に気遣っているだけなのか。それとも元々俺を嫌っていないのか。

何か事情があって、俺を風間ファミリーに入れたくないのかな。

そういえば百代さんの欲求不満が、今日最高潮に達していたな。こ
れはもう数日も持たない。

だが学長と約束したし、明日ぐらいには解禁してくれるかな？

それにしても、今日は疲れたな。授業中に寝たら成績が落ちるし、
だからと言って昼休みはまゆっちや風間ファミリーと親睦を深めて
いたし。寝る暇がなかった。こんな時は多摩川の土手で居眠りが一
番だ。

とまあそんなわけで寝やすい場所が無いか探索中。ついでにこの間
のお姉さんを探してみた。

いた。

腰まで伸びた長髪、腰に結ばれたジャージの上着、俺よりちょっと大きい背丈。あの寝姿は間違いない。あのお姉さんだ。

どうやら今日は団体のようだ。お姉さんの他に、渋くてダンディーなおジサン、小っちゃくツインテールのお子様。

三人とも仰向けで仲良く川の字で寝ている。左からおジサンお姉さんお子様の順。一見仲の良い親子のようだ。

「あん？ 誰だテメエ」

オジサンが起きた。さっきまで寝ていたはずなのに突然目を覚ました。まるで気配だけで俺を感知したみたいだ。

「……よく見りやお前、アイツに………気のせいかな」

俺の顔をジッと見つめて溜息を吐いたオジサン。なんだ、誰かと間違えたのか？

「どうしたんだよ師匠。人が眠っている最中に。つかお前誰だよ？」

お子様も目を覚まして俺に睨みをきかせる。初対面の人に良くそんな顔できるな。

「Z z z ……あ、この間の」

「どうも」

真ん中で寝ていたお姉さんも気付いたようだ。しかも俺の事を憶えていたようだ。

「なんだ、辰姉の知り合いか」

「うん、そうだよ。まあ名前も知らないんだけどね」

そういえば名前を言ってなかったな。あの状況で名前を言う暇も無かったけど。主にお姉さんが寝ていたから。

「今日も昼寝しに来たの？」

「はい。今日は体中が怠いんで」

「じゃあ一緒に寝ようよ。気持ち良いよ」

そう言ってお姉さんはオジサンとの間を詰めて、お子様とお姉さんの間に人が一人はいるスペースが確保された。

「おい、ウチの隣で寝かせる気か？」

「駄目なの？」と真顔でお子様に聞くお姉さん。

「駄目に決まってるだろうが！　どこの馬の骨とも知らない奴と、一緒に眠れるかつーの！！」

「知っていれば良いんだね。君、名前なんて言うの？」

「西園寺伸二ですけど」

「西園寺……そうか。何か引っかかると思ったら、てめえあやめの息子か」

オジサンの口からトンデモナイ言葉が吐かれた。このオジサン、母さんの知り合いか？

「なんだ師匠と知り合いなのか？」

「ちげえよ、天。こいつの母親と知り合いだ」

「母さんを、知っているんですか？」

「まあな。どうだ最近あやめは。相変わらず元気にやりたい事やってんのか？」

そうか。この人は母さんが死んだことを知らないのか。

「いえ。母は数年前他界しました」

オジサンは驚いた顔をしていた。まるで予想にもしなかった。あやめが死ぬなんて何かの嘘だろ。みたいに思っているのかな。

「そうか。死んだかあやめは。結局アイツの勝ち逃げかよ」

右手で両目を隠すオジサン。どうやら本当に落ち込んでいる。

「オジサン、母さんと戦ったことあるのか？」

「オジサンじゃねーよ。俺の名前は釈迦堂刑部しゃかどうけいぶだ。気軽に釈迦堂とでも呼べ」

「じゃあ気軽に。釈迦堂は母さんに負けたのか？」

「てめえ、師匠になんて口ききやがる!!」

師匠をバカにされたと思い怒ったのか、お子様は何処からともなくゴルフクラブを取り出した。

「止めろ、天。良いんだこいつは。むしろ合点がいった。こいつは間違い無くあやめの子だ。俺を初対面で呼び捨てにする度胸がある奴は、この家系以外には居ねえよ」

そう言って隣のお姉さんをそっちに詰めろと、お姉さんと釈迦堂の間にスペースが出来た。

「ここであつたのも何かの縁だ。話でもしようぜ」

こうして俺は釈迦堂と板垣姉妹と出会った。

「そうか。あやめは病気だったのか」

「ええ。生まれつきの不治の病で、ここまで生きたのが奇跡だと医者が言っていました」

板垣姉妹と自己紹介を終わらせて、俺は釈迦堂さん（流石に年上に呼び捨ては失礼なのでさんを付けた）と母についての情報交換をしていた。今は俺が知っている母の情報を釈迦堂さんに伝え終わった所だ。

ついでに俺は何故か辰子^{たつこ}さんに抱き枕にされながら釈迦堂と会話を

している。

なんだこの状況。辰子さんの胸が肩に当たって役得過ぎる！

「はあ。つたく、アイツには敵わねえな。色んな意味だよ」

釈迦堂は遠くを見つめ深く息を吐いた。

「こんどは釈迦堂さんの番ですよ。高校時代の母について教えてください」

「いいぜ。教えてやるよ。――アイツはやりたい事を何でもやる人間だったよ。突然川神院に殴り込みに来たと思ったら、各県の絶品グルメを一カ月学校休んで巡ったり、学園の決闘システムが気に食わないからって生徒会長になって改訂したり」

「生徒会長にもなってたんですか」

「ああ。当初の決闘システムは単純に武器や殴り合いの試合だけで生臭かったからな。誰でも決闘が行えるように決闘は知略でも腕力でもどんな事でも決闘で出来るようにしたんだ。アイツがいなければ、きつと今でも血生臭い試合だけだと思っぜ」

ま、俺はそっちのほうが断然良いけどな。と付け加えた。

「凄かったぜ、あやめは。赤ん坊を背中に背負って大抵のヤツは、千切っては投げ、破っては捨て、壊しては碎いてたぜ」

俺を背負いながらって。考えてみるとシュールな絵だな。

「子連れ武士娘っつー渾名が定着するまで時間の問題だったぜ。学園内のヤツは勿論、武道四天王や、あのルーまで子供を背負った状態のあやめに負けた。……まあアイツは優しかったからな。背負った赤ん坊を気にして攻撃が甘かったのが敗因の原因だが」

俺は耳を疑った。あのルー師範代までも俺の母さんにやられたのか。強すぎるだろ俺の母親。

「その後だ。俺があやめに興味を持ったのは。学園に強い奴が居るって聞いてはいたが、ルーを倒す程とは思わなかった。久しぶりの好敵手に出会えた俺は、あやめと戦ったよ。」

俺は驚いたよ。俺が相手でもあやめは赤ん坊を降ろさなかった。無慈悲な俺は、赤ん坊がいることも構いなく攻撃を仕掛けたが全部受け止めたよ。赤ん坊を守る為に。

いやあ。母は強しとはこの事を言うんだな。あからさまに赤ん坊を狙った攻撃をしたら、あやめは鬼のような形相で俺の顎を砕くんだ。

人生二度目の敗北だった。一度目は川神のジジイ。二度目は年端もねえ乳くせえ女子高生に、だ。

それが俺が知るあやめの全てだ。俺と戦った後に卒業してそのまま会わなかったよ。ま、俺も川神院を破門されてから川神市に来なかったのも、理由の一つだ」

釈迦堂さんはゆっくり立ち上がり、腰や体全体を伸ばすようにストレッチを始めた。

「わりいな伸二。俺達はこれから仕事があるもんでここらでお暇ぐいどまするわ。おい、辰、天、起きろ」

「ふぁゝっあ。もうこんな時間か。良く寝たぜ」

「そりゃよかったな、天。オイ辰！ もう時間だ！！」

「Z z z Z z z」

釈迦堂さんの呼びかけにも応じない辰子さん。すごい寝つきだ。ここまで大声で怒鳴られても起きないなんて、一つの才能なんじゃないか。

「駄目だこりゃ。天、起こしてやれ」

「あいよ！」と元気な返事をした天使エンジェルは眠っている実の姉かかとに踵落としを決めた。しかも体重を遠慮なくかけて。

「あうっ！ ……やあ伸二君。おはよう」

踵落としを気にしないで俺におはようなんて……。人間の規格外の丈夫さだ。

「おはようございます」と挨拶を返すと俺のほっぺにチュツとキスをした。

見る見るうちに俺の顔が熱くなる。自分では見えないが、俺の顔は真っ赤になっているだろう。

「辰姉、本当にそいつの事気に入ってるんだな」

「うん。だって伸二君可愛いんだもん」

これはあれか。可愛いペットにキスする心境で俺にキスをしたのか。これは男としてちょっとショックだ。

「やっと起きたか。ほら辰、これから仕事なんだから、ちっとはシヤキツとしやがれ！」

「うん、わかった。あ、伸二君。またね」

「はい。またの機会に」

別れの挨拶を残して、三人はこの場を去って行った。

この出会いが今後の人生に大きく係わるなんて、この時の俺はまだ知らなかった。

第十四話 眠れる河川敷のお姉さん Part 2（後書き）

御手洗団子以後略。

眠れる河川敷のお姉さん Part 2 ですが、辰子の出番少
ねえな。

ほとんどが釈迦堂との会話で終わってしまった。

天使も出してはみたものの、会話が少ねえ。

そういえばいつの間にか10万PV超えていました。こんな拙い小
説をこんなにも開いてくれるとは感謝感激感動の嵐です。

ではまた次回にお会い致しましょう。

第十五話 百代の戦闘解禁

百代は荒れていた。

また鉄心に呼び出されたのだ。

自分が戦闘を我慢しているのに、よくもこう何度も呼ぶな。自分は約束を守っているし、この荒ぶる欲望を収めていたいのに。

百代は鉄心の部屋に通じる障子を開けると、やはり鉄心が一人であった。

内心荒れている百代は仏頂面で鉄心にこう言った。

「ジジイ。私は疲れているんだ。要件なら早くしてくれ」

百代は、ここに長居はするつもりはないと言わんばかりに部屋に入らずに廊下で立っている。

「なあに、今日はお主に嬉しいニュースを届けに来たんじゃ」

百代は若干回りくどい鉄心の口調にイラつきを憶える。どうせ大した用事ではないだろ、さっさとここから去らないと鉄心と戦いたくなる。

「川神百代。今からお前の戦闘を解禁する。以上」

突然の戦闘解禁宣言に、百代は動きと思考が止まった。

「どういう事だ、ジジイ。まだ伸二に何も罪滅ぼしをしていないだろ」

「ほっほっほっ。簡単な事じゃよ。お前の腕が鈍ったら、伸二の奴が困るのじゃ」

「伸二が、困る？」

百代は無い頭をフルスロットルで回転させるが、答えが出ない。どうして自分が戦わないと伸二が困るのか。

「……スマン、ジジイ。なんで伸二が困るんだ？」

「さあな。ワシも知らん。二日前にお前を呼び出した日があったろ。その時、屋根裏に伸二が盗み聞きをしておったのじゃ。お主、気付いておったか？」

「……ああ。ネズミかゴキブリの生物の気配を感じ取ってはいたが、——まさかそれが」

「ああ。その気配の正体が、伸二じゃ。……もしかすると、実際はネズミと伸二の両方がいて、伸二の気配が感じられなかったかもしれないが」

百代は驚愕した。

伸二の実力はそれなりに推測をしていたが、まさかこれほどと言うまでもないが、『隠れる』才能を持っていたのは驚きだ。

「その伸二が、ワシとモモの約束を聞いてしまったな。モモが部屋

に戻った後、屋根裏から出て来たのじゃ。

その伸二がの、開口一番に『百代を戦わせろ』とワシに責めるのじゃ。

『これでは俺が困る』なんての。」

鉄心は茶を啜り話を続ける。

「勿論ワシは断ったのじゃが、伸二がどうしても言うんでな。なのでモモ、お主を今日この時を以って、戦闘を解禁する」

百代としては願ってもない嬉しい知らせなのだが、そこでなぜ伸二が、と考え始める。

「……なあジジイ。本当に知らないのか？」

「諄^{くど}い」と百代の質問を鉄心は一言で済ませる。

「おい、本当に知らないのか？」

「そんなにワシの言葉を信じられんのなら、別に戦闘を解禁しなくてもよいのじゃぞ？」

「……………わかった。なら、ジジイは知らない、ということにしてく。じゃ、明日からまた暴れるか」

そう言い残して百代は鉄心の部屋を出て行った。

——隠し切れぬ殺気を放ちながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4821x/>

真剣で私と戦いなさい!!

2011年11月29日14時28分発行